

く、余は六回以上、悲憤慷慨し、暗涙に咽び、心狂するまでに感奮して、シメオン、シーザー、ブルータス、ペロピダスの傳を読みたり。讀みて此等の英傑が大なる艱難に遭遇する事に至る毎に、余の感奮せる默想は、余をして席に堪へざらしめたり」と。ブルタークは亦、シルレル、フランクリン、ナポレオン、或はローランドの如き種々の人物に愛讀せられたり。ローランドは、刹那もブルタークの英雄傳を手放すことなく、教會に行く時も、經卷と共に之を携へ、執務中も人目を忍びて默讀したりと云ふ。

ブルタークは、亦佛國のヘンリー四世、チュウレン、ナピールの如き勇士の食物なりき。サア、ウキリアム、ナピールが少年時代の愛讀書の一なり。彼は是によりて小供心に古英雄の傳を偲び、其感化は、彼の品性と其生涯に疑ひもなく、非常の影響を與へたり。彼が病みて將に死せんとせし時、夢は常にブルタークの英雄傳の上に馳せ、病苦を忘れて、數時間、其養嗣子に向ひ、アレキサンダー、ハンニバル、シーザーの偉業を論じたりと云ふ。古今を通じて、讀書により感化せられたる人の投票を募ると假定せば、大多數を得る者は、(バイブ

ルを例外として、必ずブルタークならん。

如何なれば、ブルタークは、今日に至るまで、絶えず有らゆる時代及び有らゆる階級の讀者の注意を引き、趣味を起すに成功し得たるかと云ふに、第一の理由は、其書の内容が、世界史上に卓越せる英雄なりし事にして、第二の理由は、彼が此等の英雄を寫して、紙上に活躍せしむるの筆力を有したる事なり。加之、彼は各英雄の性格を解説する力を有したり。蓋し此個人的性格は、傳記に、魔力と趣味とを與ふる根本要素なり。偉人が最も人を感動せしむる方面は、其事業にあらずして、其品性なり。其智力にあらずして、靈の力なり。故に、傳記の方が、其口よりも、遙に能辯なる人あり。此の如き人の品性は、其事業よりも、遙に偉大なるものなり。

ブルタークの書中には、英雄を詳かに傳したるものあれども、其多くは、略傳なり。即ち省略實に、其宜しきを得たるものにして、篇中の白眉たるアレキサンダー傳及びシーザー傳の如きは、半時間にして讀過し得べし。然れども、簡勁は冗長に勝る。無用の筆は、省かれたれども、性格は躍然として、紙上に活

動せり。モンテインは、ブルタークの略筆に慊焉たらざる意を述べ、且つ曰く、『されど、疑ひなく、彼の眞價は、此點にあり。ブルタークは、其智識の該博を示さんよりも、寧ろ其の燃犀なる判斷力を示さんと期したるならん。斯くて、既に讀みたる所に、大食して飽かんよりも、尙ほ讀むべく食慾を殘さんとしたるなり。好題目には、如何に言を費すも尙且つ足らざるものあることは、彼と雖も知らざるにあらず……瘦せたる人は、衣服を以て體格を補ふものなり。故に動作に於て缺點ある人は、言語を以て之を補はんとするものなり』と。

○ブルタークは、性格と行爲の微并に英雄の瑕瑾的弱點を詳述する術を有せり。此等は皆人物の忠實なる詳傳に必要なものなり。モンテイン曰く、『彼の筆法を見るに、人生の瑣細なる行爲を捉へ來り、或は、不必要と思はるゝ一語を加ふ。然れども、そは、熟讀するに及びて、初めて完全なる議論なることを知る』と。歷山王は常に頭を一方に傾け、アルシビアデスは伊達者にして、語の調子甘たるを故に、嬌艶人を説伏するの魔力ありたりとか、ケートーは毛髮赤くして眼青く、其奴隷が年老いて、勞働に堪へ難くなるや、無慈悲にも賣飛

ばしたるほどの、薄情者にして高利貸なりとか、シーザーは頭禿げて、派手なる衣服を好みたり、シセロの鼻は厭に振れたりなどの如く、極めて隱微なる點を寫すまでに、丁寧なり。

品性の描寫

論者或は、斯の如き微細なる記事を以て、傳記の品位を毀損する者となさん。然れども、ブルタークは、人物を完全に描寫せんには、之を以て必要條件なりと考へ、人の癖、形狀、習慣、特徴の如き、性格の微妙たる點を寫すは、即ち其人物を活躍せしむる所以なりと信じたり。ブルタークの本領は、妄りに輕重を加へず、萬人の眼に留まるべき事柄を放過せずして、斯の如き微細なる點に、深刻なる注意を與へたる所に存せり。時として、彼は逸話によりて、個人の性癖を摘發することあり。こは蓋し美辭的敘述よりも、深刻に其性格を穿つものなり。或る場合には、其英雄の好める格言、又は、心の暗示たる他人の格言を挿入することあり。

却説又、弱點に關しては、偉人各々其趣を異にす。各自固有の缺點と、弱點とを有せり。而して、偉人が其通常の人情を示すは、此缺點あるが故なり。吾人は

遠く望みて、彼を神の如く崇拜すれども、近く之に接すれば、只の人間にして、吾人の同胞なることを發見するなり。

偉人の弱點を指摘するは、必ずしも必要ならざるにあらず。ジョンソンの言ふが如く、品性の光明なる方面のみを見て、暗黒なる方面を示さざれば、吾人は唯失望落膽して、模倣すること不可能なりと考ふるに至らん。

ブルタークは、歴史を書くが目的にあらずして、傳記を書くが目的なりとの主張によりて、斯の如き筆法を用ひたるなり。彼言へることあり。曰く、『赫々の勳功によりて、必ずしも常に其人の徳、不徳を明かに斷定するを得ず。時としては、一刹那の出來事、談話、或は笑談等が、戦場の手柄話、戰略乃至都城の攻略等よりも、遙かに能く其人の性格及び性癖を吾人に示すことあり。故に、肖像畫家が常に性格を表示する所の顔面の輪廓、形狀及び眼に密にして、其他の體格に苦心せざるが如く、予は人の精神の表現に特別なる注意を拂はざる可からず。予は此手段によりて、彼等英傑を傳す。必要なる出來事及び戦爭談の如きは、之を他人の筆に俟たんとす』と。

一場の笑談に類せる事は、歴史にも傳記にも多し。而して、瑣細なる事情が却つて、非常なる結果を來たし得るものなり。パスカル曰く、『クレオパトラの鼻にして、更に低かりせば、世界の人の顔は恐らく變化せられしならん』と。然れども、亦ペピン・ゼファットが多情なりし爲めに、サラセン人は、世界に蔓延したり。蓋し彼等をツールに幽閉し、後之を佛國外に放逐したるは、彼の私生兒チャールスマーテルなればなり。

詩人スコットは、腕白盛りの時に、屋内を走り廻りし折柄、過ちて、足を挫きし爲めに跛者となりしが、此一事は、詰らぬ話のやうなれども、彼の傳記に特筆すべき一大要件なり。彼に『アイヴァンホー』や、『オールド・モーターチー』の如き所謂『ウェバーレー、ノーベルス』と稱せらるゝ幾篇の小説あるは、其因遠く此所に在り。其子が軍人を朱望せし時、スコットが、『サウジ』に寄せたる書中に曰く、『予は其朱望を拒絶するの權利を有せず。蓋し予が跛者にあらざりせば、軍人は予の素志なりしなり』と。されば、スコットにして、足だに満足ならば、半島戦争に奮戦して、胸間に勳章を幾個も燦然たらしめたるなるべし。然れど

も果して斯の如くなりし曉には、恐らく吾人は、彼の名を不朽ならしめ、彼の國に幾多の光榮を興へたる、彼の詩歌小説は、之を見ること能はざりしなるべし。タレランは、跛足の爲めに兵役を免除せられたり。然れども、之が爲めに、讀書と人間の研究に其注意を向け、遂に非凡なる外交官となりたり。バイロンの畸形なる脚は、詩人としての彼の運命を決するに甚だ力ありたり。此畸形の爲めに、彼の心振けざりしならば、彼は詩の一句をも作らず、天下の好男子を以て自ら任じ、一世の豪奢を極めしなるべし。然るに、彼の畸形なる脚は、偶々以て、彼の心を刺戟し、彼の勇氣を鼓舞し、彼の本領を自覺せしめぬ。吾人は結果の上より、其然る所以を見るなり。

さて、又スカロンに就きて、彼の殘忍冷酷なる詩歌は、其僞儻に負ふ所多しと謂ふべし。ボープが深刻なる諷刺詩は、幾分か其畸形に負ふ所あり。ジョンソンの言ふ所に據れば、彼は、前と後へ脹れ出す不具者なりき。ミーコンの畸形論は、疑ひもなく、一大真理なり。曰く、『身體に輕蔑を招くべき申分ある人は、皆自ら嘲弄を受けざらんやうにとの永久なる刺戟を有す。故に總て畸形

なる人は、非常に「大膽なり」と。

肖像畫に明暗ある如く、傳記にも亦明暗あり。肖像畫家は、畸形を故らに描かんとて、當人を苦しめざるなり。傳記者も亦故らに、人の缺點を發かざるなり。クロムウエルの如く心に表裏なき人は、極めて罕なり。クロムウエル嘗てクトパーをして、其肖像を描かしめたる時、戒めて曰く、『足下黒子も何もかも、有りの儘に手を盡く可し』と。顔及び性格の寫生を期せば、實物の儘に描寫せざるべからず。詩人ウォルター・スコット曰く、『詩文中最も趣味多き傳記は、主要なる特質の明暗を精密に忠實に描けるものなり。予は舞臺の上で大法螺を吹く英雄に同情するほど、唯無闇に賞めちぎる人に同情を表すること能はず』と。

アヂソンは、書を読み、感興に乗ずること益々大なるに従ひて、益々其作者の人格を知らんと欲せり。彼等の歴史、經驗、性情、性質は如何。彼等の生涯は、彼等の著作物に相當せるか。彼等の思想は高潔なりしか。彼等の行動は正大なるか。サア、エガートンブリッヂス曰く、『吾人はウォーヅウォース、サウジ、

コレリツヂ、カメル、ロージャリス、ムーア、及びウキルソンが自叙せる、一生の事歴及び感想の明白地なる實話を得るを喜ばざらんや。如何にして、彼等の特性が、彼等の運命を定めたるか。彼等の好む所、好まざる所は如何。彼等の艱難辛苦は如何。彼等の嗜好及び情慾は如何。如何にして、岩にあたりて碎かるゝの危険を自覺したるや。彼等の悔恨満足、覺悟は如何」と。

メイソンが、グレイの私書を刊行して、世の非難を招きたる時、難者に答へて曰く、『足下等は常に我友人が盛装して現はれんことを好むか』と。人の傳を書かんには、著者は宜しく個人的に其人を識るを要す、とはジョンソンの説なり。然れども、不幸にして、現今の傳記文學者は、此要件に缺乏せり。カメル卿の場合に在りては、彼のリンダハースト卿及びブルーム卿との親交は、却つて不利なりしが如く、其性格の長所を短にし、短所を長とするの奇觀を示せり。ジョンソン又曰く、『人を傳せんと欲せば、有りの儘に書かざる可からず。其特質及び瑕瑾と雖も、明白地に記せざるべからず。蓋し彼等は其品性を表はせばなり』と。然れども、こゝに一の困難あり。現存せる人の秘事を發くは、其

人を傷くるの虞あること、即ち是れなり。而して、此等の秘密は語るべき時期到來する時には、既に忘却せらる。蓋しジョンソンは、彼と同時代の詩人に就き、知れる限りの事を語らんと欲して、豫防線を張りたるなり。故に彼は『火の消えざる灰の上を歩むが如き感あり』と自白せり。

此理によりて、親戚故舊の人の編せる名士の傳記に、露骨に其性格を寫したるもの少なく、自傳は頗る趣味あるものなれども、此點に於て、亦少しく憚焉たらざるものあり。自己に於て知れる一切を忌憚なく叙するを欲せざるは人の情なり。聖アウガスチンは稀有の例外なり。然れども、彼が其書、白狀に於けるが如く、生來、我は奸智に長け、残忍酷薄なりと、明白地に、自叙する人は多からず。最も善き人の過失を、其額に書き記せば、其人は帽子を眉深く引下ろすと云ふ、ハイランドの諺あり、ザオルテール曰く、『人として缺點なきはあらず。何人も野獸の如き或る物を有す。然れども、其野獸の取扱方を正直に談す人は極めて少なし』と。ルウソーは其著、コンフェッションに於て、秘密なしと告白すれども、公表よりも隠蔽多きは火を觀るよりも明かなり。世の毀譽

褒貶に無頓着なりしシヨンフォルすら、尙ほ且つ言へることあり曰く、「人に我が心の秘密自ら認識せる品性の細目を示す事は、社會の實際上不可能なるものゝ如し。親友にすら、我が弱點瑕瑾は告げ得ざるものなり」と。自傳は兎に角寫實なりと雖も、表裏あり、假裝的なり。時には虚構なることあり、事實を事實として露骨に示さざるものなり。側面の肖像は眞に迫れり。然れども、頬の上の傷或は眇目を明白地に表はさば、顔面の形状は忽ち一變するに至らん。スコット、ムーア、サウジは、自傳を書き初めたりしが、困難なる繼續事業なることを曉りて中絶したり。

佛蘭西文學は、殊に傳記的言行録に豊富なり。英國は甚だ乏し。吾人はスウリー、デ・コミン、ローザン、デ・レックス、デ・ツィー、ロシエ、フオコールなどの備忘録を喜ぶ。蓋し是によりて當時の史的大人物の半面を窺ひ得ればなり。彼等は生涯と性格とを説明すべき逸話に満ち、輕佻浮薄なる事項を網羅し、其時代の社會的風習及び文明を知るに好個の材料たり。セイン・シモンの備忘録は、一層有益なるものにして、性格の解剖は其特色なり。故に解剖的傳記中の白眉

たるものなり。

セイン・シモンは、路易第十四世の宮中秘密探偵とも謂ひ得べし。彼は人の性質を視るに慧眼にして、容貌舉動、談話等によりて、其人の意思を測るに妙を得たり。彼曰く、「予は詳細に人物を探偵せり。常に彼等の口と眼と耳とに注意を拂へり」と。彼は驚くべき健筆を以て、其見聞を録し、周到深刻燃犀なる觀察力によりて、宮廷裡の假面を穿ち、其秘密を看破せり。其好める性格研究に對せる熱心は、餘りに極端に走りて、寧ろ殘忍皮肉の嫌ひなきにしもあらず。ラブルール・エルの性格觀察力は、セイン・シモンと伯仲の間にありたり。彼は綿密燃犀なる眼を以て、種々の人物を觀察研究し、其秘密を看破し、之を手記して、他日著作の材料としたり。

傳記特に緣故深き人の作りたる傳記の趣味は、三國史的にして、備忘録の趣味は、皮肉的なりと謂ふを得べし。然し其三國史的なると皮肉的なるとによりて、趣味の大小に區別あるにあらず。而して傳記に顯はれたる趣味は、高尙にして教訓的なり。實に傳記は人情の寫生なるが故に、最も多數の讀者を

有する文學の一種なり。

傳記と小○戯曲小説の趣味が主として其傳記的要素に發するものなることは、殆ど疑ふ可き餘地なし。ホーマーのイリアッドは、英雄的性格を描寫したる著者の天才によりて有名なり、然しホーマーは、其人物の容貌、形狀等を詳細に説明せず。ドクトル、ジョンソン評して曰く、「ホーマーの英雄的性格の描寫は完全にして餘蘊なし。別個の性格を有せる英雄は、今日まで未だ世に出てざるなり」と。

沙翁の天才も亦性格の描寫と、千種萬別なる人情の展開との上に發揮せらる。其脚本中の人物は、皆活ける人なり。セルバンテスに於ても亦然り。其サンチヨ・パンサは、平凡野卑の人物なれども、極めて自然的なり。ルサーヂの「ジール、ブラゴールド、スミス」の「ダイカー、オブ、ウエイクフキールド」及びスコットの小説中の人物は、活きたる人なり。デフォーの小説は、皆一種の傳記にして、其「ロビンソン、クルソーウ」や「コロネル、ジャック」は小説的人物に託して、實在の人物を寫したるものと謂ふ可し。

小説は社會の縮圖にして、傳記は實際の人物を描けるものなるが故に、小説よりも興味あるべき筈のものなりと雖も、古來文學の天才にして、此種の製作に従事したる者は、誠に少なし。是れ豈に奇なる現象にあらずや。小説の傑作は多し、然れども傳記の傑作は指を屈するに足らず。こは蓋し肖像畫家の巨擘ジョン・フリップが「肖像畫は報酬少なし」と言うて、寫生畫を取りたると同一の理由によるならん歟。傳記の編纂には、觀察研究の苦心、材料の蒐集、適宜なる省略、並に性格寫實の伎倆等を要す。然るに小説にありては、著者は想像力によりて、自由自在に性格を創作し得て、事實に拘束せらるゝことなし。

大傳記は
少なし

容量ばかり尢然として、實のなき傳記は、汗牛充棟も管ならず。然れども彼等は、唯徒らに材料を陳列したるのみにて、糊と鉄との仕事に過ぎず。コンスタールが「デモ美術家を、彼は彼の頭より骨と腦とを取去れり」と痛罵したる語は、此等多數の平凡なる傳記の評となし得べし。彼等は、臘人形乃至洋服屋の店頭にある木偶ほどの生命もなきなり。吾人が望む所は人物の活ける

繪なり。然るに見よ、吾人は唯傳記者其人の展覽會を見るばかりなり。吾人は木乃伊にしたる心臓を期待す、然かも唯衣裳を見るばかりなり。

文字を以て人物を描寫するは、猶ほ色を以て描寫すると、其技に於て逕庭なし。双方共に觀察力と手腕とを要す。平凡なる畫家は、唯顔面の輪廓を寫すに止まるも、大家は容貌に現はれたる精神を看破して之を寫す。或る時一人の牧師、ジョンソンを訪ひ、死したる僧正某の傳記編纂の事を頼めり。ジョンソン快く承諾して、種々の質問を發したるに、其牧師は呆然として、答ふるこゝと能はざりしと云ふ。ジョンソン即ち嘆じて曰く、『友人の特色本領を知れる人は罕なり』と。

翻りて、ホスウエルのジョンソン傳を見るに、幸に、ホスウエルの銳利なる觀察力は、彼をして傳記の趣味の根本たる習慣、談話の微細なる點を寫すの餘裕あらしめたり。ホスウエルは、心よりジョンソンを崇拜せしかば、大文豪も及ばぬ成功を收め得たり。彼の語る所は、平凡にして卑近なれども、主人公の本領を失はず。故に彼は忌憚なく讀者に告げて曰く、『ジョンソンは、外出の

時太き櫛の棒を提げたり』と。更に之を敷衍して曰く、『予はアダム・スミス博士が、グラスゴー大學にて、修辭學の講義中に、ミルトンが靴を扣金にせずして紐にしたるは、嬉しき美談なりと言ひしを記憶す』と。ホスウエルはジョンソンの風采、衣服、談話、習癖を詳寫し、其弱點を發揮して憚る所なし。實にホスウエルのジョンソン傳一卷は、古今獨歩の好著にして、傳記類中の白眉なり。

ホスウエルの親交と崇拜と微かりせば、恐らく文學上に於けるジョンソンの地位は、今日の如く堅固ならざる可し。ジョンソンは、ホスウエルの筆によりて初めて生命あり。故にホスウエル微かりせば、彼は文學史上唯姓名を列せらるゝだけに止まりしならん。吾人は、沙翁に對する一ホスウエル無かりしを見て、文壇の一大恨事となすものなり。ソクラテス、ホレウス、シセロ、及びアウガスチンの人物史すら、沙翁のよりは、遙かに豊富なり。沙翁の宗教は如何。彼の政見如何。彼の經驗は如何。彼と社會との關係如何。吾人は漠然として知る所あらず。偉人を知るものは偉人なり。沙翁時代には、不幸にして沙翁を解し得る識者なかりしならんか。宮廷詩人ベン・ジョンソンは、當時沙翁よ

りも有名なる詩人なりき。彼に「シェークスピア」と題せる無韻詩あるが、唯
俳優としての沙翁を歌へるのみ。吾人が沙翁に就きて知れる事實は、老練な
る劇場管理人なりし事、猶ほ春秋に富みながら故郷に退隱せし事、死骸は村
葬の儀式を以て埋葬せられし事等二三に過ぎず。世に沙翁傳は多しと雖も
皆後世其結果の上より推測したるもののみ。然し此大詩人の情の傳記は、彼
の短歌中に發見せらる。

人は同時代の人物に就いては、常に精密なる尺度を取らざるものにして、
現今の政治家、陸海軍の大將、或は國王は、世人の耳目を充たすも、死後には全
く其名を忘れらるゝものなり。佛國革命の大動亂中、名士の暗殺せらるゝ者
多く、人心恟々たりし時、畫家グリウズ、其娘に問うて曰く、「誰か果して今日の
王たる者ぞ」と。彼謂へらく、「結局市人ホーマー、ラフェールは、曾て其名を聞
かざりし現代の我が偉大なる市人よりも生き延びるならん」と。然れども、ホ
ーマーの傳は明かならず。ラフェールにつきても、比較的詳ならず。斯くて、人
を傳したるプルタークの傳は後世に傳はらず。彼と時代を同じうせる濟々

偉人と同
時代の人

たる羅馬の文士は、一人として彼の名をだに記せざるなり。多くの肖像畫を
畫きたるコレッジョの肖像は、何人の畫筆にも上らざりしなり。

○時代精神に非常なる感化を與へたる人にして、死後に始めて名を知らる
ゝものあり。宗教改革の先鞭者ウイックリフに就いて、吾人は知る所なし。ゼイ
ミテ、ジョン、オブ、クライストの著者は、何人なりしか。今日尙ほ詳ならず。然
かも、此書は、廣く世界に行はれて、基督教國に非常なる感化を與へたるもの
なり。一説によれば、其著者はトーマス・ア・ケンピスなりと。甚だ疑はしと雖も、
其譯者なりと云ふは、充分信據すべき説なり。彼の著書を取りて之と比較す
るに、其優劣殆ど同日の論にあらず。されば、此イミテ、ジョンの著者を同人
とは信じ難し。ジョン・ジャーンソンの著なりとする夫れ、或は事實に近き乎。ジ
ヤーンソンは、佛國の大學者にして、巴里大學の總長たり。非常なる敬神家にし
て、一千四百二十九年を以て歿せり。

若干の偉大なる天才は、最も短かき傳記を有せり。大哲學者プラトンの素
性に就いて、吾人は何等聞く所なし。其妻子の有無すら詳ならざるなり。アリ

ストーリーの生涯につきましては、諸説區々として定まらず。或は曰く、猶太人なりと。或は曰く、否、彼は唯一猶太人に就きて學びたるのみと。或る者は彼を藥店の主人なりと云ひ、或る者は醫者の子なりと云ふ。或は曰く、無神論者なり。曰く三位一體論者なり。曰く何、曰く何、殆ど歸する所を知らず。比較的近世の人に就きて、吾人の知る所は甚だ少なし。魔神の女王の著者スベンサー、ヒュデプラスの著者バットラーに關して吾人の知れる事實は、唯轆轤不遇にして死せりと云ふことのみなり。吾人が最も聞かんと欲する、ゼレミー・テラーの傳は詳ならず。

「フヒリップ・ヴァン・アルテベルデの著者曰く、『世界は其偉人物に就きて知る所なし』と。健忘は、偉大なる事業を爲して世に忘れられたる人の多數を其褶の中に包めり。アウガスチンは、ローマニアスを世界第一の天才なりと言へども、吾人は不幸にして、唯其姓名を聞くのみ。彼が有名なる金字塔の建築者なることを知る者天下殆ど有らざるなり。ゴルデアニーの碑銘は、五ヶ國の語を以て書かれたれども、尙ほ忘却を防ぐに足らざるなり。

傳記なき
偉人

實に傳するに足るべき人にして、傳せられざりし者甚だ多し。是に依りて之を觀れば、著書ある人は幸運なりと謂ふ可し。何となれば、文學者は、傳記を事業の上に遺したる人の有せざる引力を有すればなり。されば、平凡なる宮廷詩人の傳は書かれたり。ジョンソンの詩人傳中に、エドモンド・スミス、如き小詩人の傳あり。然れども、彼等の詩は、今日讀む人なし。ゴールドスミス、スウキフト、ステルン、スチール等の文學者の傳記は、屋上屋を架するが如く世に出てたりと雖も、徳行家、理學者、勤勉家等の傳は録せられざるなり。

偉人の愛
讀書

本章の劈頭に於て、吾人は、讀む所の書籍の種類によりて其人の人物を知り得るものなることを言へり。請ふ吾人をして、暫時有名なる人々の愛讀書に關して數言を費さしめよ。プラタークの愛讀者は既に之を言へり。モンテーンも亦默想家の良友なりき。沙翁がプラタークを研究したることは、其作中に彼の詞を引用せるにても知らるゝ所なるが、モンテーンの書も亦沙翁文庫中にありしことは、吾人の確信する所なり。沙翁の自筆の一は、論集と云へる書のフロリヲの譯稿なるを見ても、明かなることなり。

ミルトンの愛讀書は、ホーマー、オヴキッド、ユーリピデスなり。ユーリピデスは、チャールス・ゼームス・フォックスが公開演説に必要なりとて、好んで研究せし書なり。フォックスは、ミルトンを好まざりしが、ピットはミルトンの愛讀者なり。ピットは特に、失樂園中の地獄の有力者を集めて、ベリアルベリアルの試みたる演説の節を好み、之を暗誦したり。チャタム伯の愛讀書は、バローバローの「ザイモン」にして、幾回も反復して暗記したり。バークが愛讀の友はデモスゼネス、ミルトン、ホーリングブローク、及びヤングの夜の思想なり。カランはホーマーを愛讀し、必ず一年に一回づゝ讀過したり。ヴァージルも亦彼が愛讀書の一にして、カラン傳の著者ヒリップスは、ホーリーヘッド通ひの船中にて、偶々船客一同船暈に苦める間に、彼がエネイドを讀み居たるを見たりと言へり。

○詩人中、ダンテの愛讀書はヴァーヅルなり。コルネーユのはルカンにして、シルレルのは沙翁、グレイはスペンサーを愛し、コレリツヂはコリンズ及びボールズを賞讃せり。ダンテは、チヨーサーより、バイロン、テニソンに至るを

て、英國大詩人の愛讀する所なり。ブルーム卿、マコーレー、カーライルも亦ダンテ崇拜家なり。ブルーム卿は、グラスゴー大學に於て、能辯術の研究には、デモスゼニスに次で、ダンテを必要とすと學生に告げ、ロバート・ホールは、脊髄病の苦痛を、ダンテの研究に忘れ、シドニー・スミスは、老後の慰安を、ダンテに求めぬ。ゲーテが、スピノザの倫理學を好みしは、目先變はりて面白く、彼は他の書に依りて得がたき、平和と慰藉とを、此書に求め得たりと言へり。○バローの愛讀書は、セント・クリンストムにして、ボスウェーの「ホーマー」なり。バンヤンは、サア・ベヴィスの昔話を愛讀して、其天路歷程の着想を得たり。博士ジョン・シャープ曰く、「沙翁とバイブルとは、予をヨークの僧正とならしめたり」と。ジョン・ウエスレーの青年時代に、感化を興へたるは、「ゼイミテ」シヨン、オブ、クライストと、ゼレミヤ、テラーの「神聖なる生死」の二書なり。然しウエスレーは、常に友人の多讀を戒めて、次の如く言へり、「君書に吞まると、莫れ、愛の一オンスは、智識の一ポンドに勝るものなり」と。ウエスレー傳の愛讀者は、多し。詩人コレリツヂは、サウジがウエスレー

傳の卷頭に序して、其藏書中最も屢々手にせる書なることを言ひ、且つ曰く、『予は病氣、衰弱等によりて、無聊を感ずる毎に、此書とリチャード・バックスター
一傳を讀みて回復するを常とせり。數時間没我の境に入らしめたるは、此ウ
エスレー傳の庇蔭なり』と。

○スーメの藏書は、僅にホーマー、ヴァーギル、ダンテ、カモエンス、タッソウ、及
びミルトンの數種に限られたり。デクインシーの愛讀書も、僅にドン、コリン
ウオース、ゼレミイ・テラー、ミルトン、サウス、バーロー、及びサア、トウマス・ブ
ラウンの數種なり。彼は此七文豪をば、七大星と稱し、是に依りて一大哲學
を組織せんと期したり。

普魯士のフレデリック大王は、書籍の選擇に當りて常に佛蘭西最負なり
き。其愛讀書の主なるものは、ベイル、ルソウ、ヴォルテール、ローリン、フリウ
リ、マールプロンシ、及び英國のロックなり。特に其愛せしものは、ベイルの辭
書にして獨逸に譯せしめたるほどなり。『書籍は眞の幸福の大部分を作るも
のなり』とは、フレデリックの格言なり。又晩年に言へることあり。曰く『朕の最

後の嗜好は文學に在り』と。

獨逸の元帥ブリュッヘルの愛讀書がクロップストックの『メッシア』にし
て、那翁ナホレオンのがオシアンオシアンの詩集とゲーテの『ウエルテル』のわづらひなりしは甚
だ奇なり。然れども、那翁が讀書の範圍は極めて廣く、ホーマー、ヴァーギル、タ
ッソウ、各國の小説、古今の史籍、數學、立法學、神學の多岐に亘れり。那翁は、ヴォ
ルテールを曲學阿世と罵り、ホーマー、オシアンを絶えず稱讚せり。嘗て軍艦
ペレロフォン號に座乗せる時、其一士官に告げて曰く、『アキレスの詩人を再
讀三讀せよ。オシアンに耽るべし。此等は精神を向上し、人をして偉大ならし
むるものなり』と。

ウエリントン侯は、非常なる讀書家にして、最も愛讀せしは、クラレンドン、
僧正バットラー、スミススミスの『富國論』、ヒューム、ゼアーチ、デュロク、チャーレス、レ
スリー、及びバイブルなり。又特に英佛の傳記類に興味を感ぜり。グレイグ曰
く、バイブル、祈禱書、テラーの『神聖なる生死』及びシーザーの『コンメンタリ
』が侯の愛讀書なりしことは、其手垢の着きたる様子にて明かなりと。

書籍は青年を感化する

書籍は、老年の好伴侶たるのみならず、亦最も能く青年を感動せしむるものなり。青年の心に深き印象を興ふる最初の書は、屢々其生涯の一新時期を作るものなり。そは青年の心に火を點じ、其熱心を刺戟し、意外の方針に其力を向け、永久に其品性を教化す。新しき書は即ち吾人よりも賢良なる友と吾人を昵懇ならしむるものにして、一生涯の歴史に必要な出發點を形づくものなり。或は新生涯の光とも見るを得べし。

ゼームス・エドワード・スミスは、初めて其植物學教科書を得たる時より、サア、ジョセフ・バンクスは、ゼラルドの著ヘルバルを讀みし時より、アルフ・ホエリは、初めてプルトークを、シルレルは、初めて沙翁を知りたる時より、ギッポンは、万国史の第一巻を初めて手にしたる時より、感激して、其眞生涯を作り初めたり。

ラフォンテーンは、少年時代を怠惰に放過したりしが、マールブルクの詩を誦するを聴き、慨然として、我等亦詩人たるべしと絶叫し、此に初めて其天才を覺醒したり。チャールレス・ボスエーは、少時フォンテネルの「エロジス」を讀み

て感奮其學に志しぬ。フォンテネルの他の書「世界複數論」は、ラランドをして天文學に志さしめたり。

同様に、ラセペードは、ブッフフォンの博物學を讀みて、博物學の研究に志したり。彼は、父の藏書中に此書を得、一讀三嘆し、再三再四反復して、全部を暗記するに至りたり。ゲーテは、心力發展の時期に偶々、ゴールドスミスの「ザ・カール・オブ・ウエークフホルド」を讀みて、非常に感動し、其素養を此書の賜に歸せり。ゲーテは、又ゲッツ・フォン・ベルリヒンゲン傳を讀みて、奮激し、之を詩化して名篇を得たり。曰く「厭世時代に於ける此自助家の態度は、予の深き同情を喚起したり」と。

キーツは、幼より非常なる讀書好きなりしが、初めて其詩才を自覺したるは、魔神の女王を讀みたる時よりなりき。カウレーを感動せしめたるものも、亦此詩なり。傳に曰く、カウレー一日偶々母の室にて此詩を得、何氣なく讀み初めたるが、いたく感激して、自ら詩人たらんとするの志を起したりと。コレリッチは、ポールの詩より大なる感化を受けたりと自認せり。彼の

説に曰く『昔の書物は、青年に取りては、他國人の物の如き心地するものなれども、同時代の人の書物は、彼に取りては實在なるが故に、人間同士に於けるが如き友誼を喚起するものなり。彼の眞の感嘆は、彼の希望を吹く風なり。詩其者は、肉と血との財産を横領す』と。

書籍の感化は唯り文學界のみに限らず、亦人生の眞面目なる事務に人を導くの素因をなせり。一例を挙げれば、ヘンリー・マーティンは、ヘンリー・ブレイナード及びドクトル、カーリーの傳を讀みて、大志を起し、宗教界に勇壯活潑なる活動を始めたが如し。

ペンザムは、少年時代に、『テレマック』を讀みて、非常なる感化を受けたり。自ら語りて曰く『有益なる書は、予の掌中に置かれたり。そは、『テレマック』なり。わが想像にて、五六歳の時、予は完全なる徳の模範とも思はるゝ英雄の人格と予の人格とを一樣にせり。而して、予が人生の行路は、如何様になるとも願みることなく、時々自語して曰く、何故に予は、『テレマック』と成らざるかと。此物語は、予の品性の土臺石にして、予が行路の出發點なり。予は信じて謂へらく、

予が『功利主義』と題せる書に於ける最初の微光は、遠く此處に追及せらるべし』と。

コベットの愛讀書は、『三ペンズ』にて古本屋より求めたるスウィフトの、『テール、オブ、エ、タップ』なり。彼の簡勁にして深刻なる文體は、確かに其感化なり。ポーブが小學生徒時代にオヂルサイのホーマーを讀みて覺えたる感興は、後日彼をして、『イヤット』の英譯あらしめたる所以なり。パーシーの、『レック』がスコットの小供心を動かしたる結果は、其、『ホルダー、バラッド』なり。ゲートリーが詩人となるの大志は、幼時初めてミルトンの失樂園を讀みたる時に動かされたるなり。彼言へることあり曰く、『失樂園を讀めば、趣味と詩的感想とを有する人は、必ず其生涯に於ける一時期を形づくるべし。予が心には、其時期は常に現在なり。爾來、ミルトンの詩は、予が不斷的研究を形づくりにぬ。即ち幸福を樂むの根柢にして、逆境に於ける慰安の根本なり』と。

斯の如く、良書は良友なり。且つ思想と熱望を高むるが故に、人心の墮落腐敗を豫防するものなり。トーマス・フッド曰く、『讀書と勉強とに於ける自然の

良書は善行に似たり

書籍は人生の日用品なり

變化は、早く父母の指導より離れたる人々に起り易き道德上の破船より、予を保護したり。書籍は、予を遊樂放蕩より守護し、ポーブ及びアディソンを書齋の友とし、沙翁及びミルトンの不言の談話に聽きて、高尚に馴れたる予の心は、悪友と交はることを求めず」と。

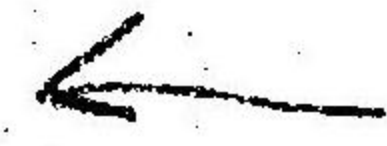
良書は善行に似たるものなりとは、天下の金言なり。書籍は高潔ならしめ、向上せしめ、保護するものなり。彼等は人の心を宏大ならしめ、俗化することを防ぐ。又高尚なる愉快及び性質の沈着を生ぜしむるものなり。又心を融和して、仁に導くものなり。北方の大學にては、古典學を研究する分科に、人道學科の名を適用せり。

書籍は、人生の日用品にして、衣服は贅澤品なりとは、大學者エラスマスの説にして、彼は此必需品を供給する爲めに、贅澤品たる衣服を買ふことを延期せること度々なりき。彼は最もシセロを愛讀せり。語りて曰く、「予はシセロの『老年』、『友誼』等の書を読む毎に、熱心に予が唇に押付けざることなく、神に接するが如き感を禁じ得ざるなり」と。セント・アウガスチンは、始末にならぬ放

蕩家なりしが、偶然シセロの『ホルテンシウス』を讀みて、翻然大悟し、前非を悔いて、遂に圓滿なる悟道の妙諦に入り、徳望一世に高かりき。サア、ウキリアム・ジョーンズは、一年に一度づつシセロを讀むを慣例としたり。其傳に曰く、『シセロの生涯は、ジョーンズの生涯の龜鑑なり』と。

熱心なる清教徒バックスターは、死の爲めに、讀書と勉強とに離るゝは、遺憾なりとて、次の如く言ひたることあり。「万一予死せば、予は肉體上の愉快と分るゝのみならず、亦吾が勉強、智識及び聖人賢人と清談するの歡樂、并に讀書、博聞、宗教上に於ける公私の運動等の歡樂と一切別れざる可からず。予は書齋を見棄て、此等の樂しき書籍と永訣せざるべからず。予は再び生ける人と交はるを得ず。又友人の顔を見ること能はず。家、都市、田野、花園等は、一切予の爲めに空とならん。予は最早世界、人間、戰爭其他の新事實を聞く能はざるなり。又學問、宗教、平和の成り行く末を見て、樂む能はざるなり」と。

書籍の道徳的感化
『バイブル』を首めとして、諸種の書籍が、人類一般の文明に及ぼしたる道德的感化の偉大なる方に就きて一言せざるべからず。書籍は人智の寶庫なり。



理學、哲學、宗教及び道德に關する、一切の勞力、計畫、思考、成功及び失敗の記録なり。常に世界の一大原動力たるものなり。デ・ボナルド曰く、『福音書より、社會契約論に至るまで、改革をなしたるものは書籍なり』と。偉大なる書籍は、實に大戦争よりも大なるものなり。小説と雖も、時として、社會に非常なる影響を及ぼすことあり。されば、佛國のラブレール、西班牙のセルバンテスは、諧謔以外の武器を用ひずして、僧侶と軍人との領土を蹂躪したり。世人は笑ひぬ。適切に感じぬ。斯くて、『テレマック』著はれ、世人を壓いて、自然と調和せしめたり。ハズリット曰く、『詩人は英雄よりも長命なる人種なり。彼等は不死の空氣を吸ふこと英雄よりも多く、思想と行爲との上に、より長く生存するものなり。ホーマーや、ヴァージルの事業は、今も尙ほ昔のまゝに殘れり。吾人は彼等の書を手にすることを得、枕頭に置くも、唇頭に置くも、思ふが儘なり。他の人の爲したる事業は、一般の人の眼に留まる如くには、世界に殘らざるなり。死せる著作者は、著作に於て、尙ほ呼吸し活動しつゝ、生存せり。世界の征服者の如きは、畢竟棺桶の中の灰のみ。思想と思想との同情は、思想と行爲との同情

よりも親密にして活氣あり。火炎が火炎中に在りて燃ゆるが如く、思想は思想と聯結するものなり。死したる勇氣の幽魂に稱讚を寄するは、恰も大理石の石碑の前に燃ゆる線香の如し。詞、理想、感情は、時の進むに従ひて實質となり、物體、行爲は朽ち果て、音響となりて空氣中に消散す。管に行爲が人の肉體と共に空に歸するのみならず、亦彼の道念及び貴き性質も、彼と死と共にす。唯り彼の智力のみは不朽にして、後世に榮ゆ。詞は即ち永久に生存する唯一のものなり』と。

第十一章

夫婦の關係

我が愛を齎つものは、婦人の親切にて、容貌の美にあらず。

シエークスピア

良人には智慧、妻には温順。

ジョーシ・ハーバート

神若し男の主人として、女を作れりとせば、神は男の頭より取りて作りしならん。若し、男の奴隸として、作れりとせば、男の脚より取りて作りしならん。されど、男の伴侶、及び同等の者として作りしが故に、神は男の胸より取りて彼女を作りしなり。

聖アウガスチン

結婚は品性を感化する

男子の品性も女子の品性も、人生の有らゆる方面に於ける彼等の結婚に依りて感化せらるゝこと著し。予輩は既に兒童の品性に及ぼす母の感化を論じたり。母たるものは、道德的大氣を作るものにて、其中に兒童は生活し、其心と精神とを養ふことは、猶ほ空氣を呼吸して、其身體を養ふが如し、女子が

幼年の保護者、教育者たるは、勿論、青年の教導者、相談相手にして、又母、姉妹、戀人及び妻としての種々の關係上、成年の知己朋友なり。一言以て之を蔽へば、女子の感化は、多少に限らず、善にも惡にも、男子一生の運命を支配するものなり。

男女の關係

男女各自の職分及び義務は、自然に明かなる區別あり。造物主は、男と女とを作りて、各自相應の仕事をして爲さしめ、相應の本分を行はしむ。互に其領分を冒すべからざるものなり。其使命は全く相異なれり。女子は女子の爲めに存在し、男子は男子の爲めに存在すると同時に、互に親密なる關係を有す。双方共に、人類の目的及び社會の進歩に必要なものなり。

女子の性格

斯く男女に優劣なしと雖も、力の程度より見るときは、逕庭あり。女子は優柔にして、感情的、神經的なれども、男子は之に反す。男子は智力に於て優り、女子は情に於て優る。而して支配するものは、智なれども、感化するものは、情なり。男子には男子の本分あり、女子には女子の本分あるが故に、男子に、女子の仕事、仕事を強ゆるは、女子に、男子の仕事、仕事を強ゆるが如く、同じく不條理なり。時に、

女性的の男子あり、又男性的の女子あり。然れども、こは例外なり。

男性は智を主とし、女性に情を主とするものなりと雖も、男子の情を智力と同様に教育し、女子の智力を情と同様に教育すること必要なり。無情の男子は、無學無智の女子の如く、文明社會に不調和なり。道德的及び智力的一切の教育は、健全なる品性の男女を作る爲めの要件なり。他人に對する同情なければ、男子は憫むべき一利己的の動物にして、練磨せる智識なければ、女子は立派なる衣服を着たる人形と擇ぶ所なし。

昔の女子教育

女子の本領は、柔弱にして、百年の苦樂皆他人に頼ると云ふ。サア、リチャード・ド・ステール曰く、『男子に威嚴の面影あらしめんには、品性の要素たる明智と勇氣とを興へざる可からず。同様に女らしき女を描かんには、柔和、羞恥、其男子と異なる所の特徴、其附屬性、及び女子をして可憐ならしむる缺陷を備へしめざるべからず』と。斯の如く女子は強味よりも、寧ろ弱味を養はれ、聰明ならんよりも、寧ろ暗黒ならんことを要求せられたり。斯の如くんば、即ち女子は、柔弱、無氣力、涙多く、品性なき劣等の動物たらざるを得ず、無能にして男子

の隨使に甘んぜざるべからず。独立的聰明即ち妻、母、友として教育するよりも、寧ろ男子の裝飾品として教育せざるを得ず。ポーブは、其道德論に於て、女子は全く品性なしと論じ、又一詩を詠じて曰く、

『女子は五色を取交ぜたる鬱金香の如し。
われが其魔力を受くるは半ば其變色に依る。
缺陷あるが故に美しくしく、弱きが故に艶なり。』

こは、マルサ、ブラウントに與ふと題せる詩の一節なり。マルサが閉花羞月の姿態は、能くポーブの紅情綠意を動かしめたり。詩中又メリ・ウ・アルト・レ・モンターグ嬢を罵る意を述べたる節あり。彼は嘗て嬢の足下に身を投げて戀々の情を寄せたるに、嬢は無情にして、落花流水の歎を得ざりしなり。然れども、ポーブは、女子を解し得ず、又男子を知らざりき。

今日にても、世の女子教育は、柔弱ならしむることに傾き、己を恃むことよりも、人の心を動かすと云ふことに重きを置けるものゝ如し。女子の感情は、肉體と精神との健康を犠牲として發達せしめらるゝの傾向あり。女子は全

く男子の同情によりて生活し、蠢動し、初めて其存在を有せり、即ち女子は男の氣を引くやうに装ひ、愛する者の爲めに容づくりす。斯くて、天下の女子は、自ら好んで、無用の長物と云ふ伊太利俚諺の活人形となれり。

反對に、青年の教育は、甚だ利己的に傾けり。少年は獨立心を獎勵せられ、少女は倚頼心を養成せらる。少年の教育は法外に自己に關し、少女の教育は法外に男子に關す。男は己を恃んで自立することを教へられ、女は己を棄て、他人に倚ることを教へらる。斯の如くして、男子の智力教育は愛情を犠牲とし、女子の愛情教育は、智力を犠牲とせり。

女子の本領が愛情を媒介とせる自他の關係に在ることは疑ふ可からざる所なり。女子は神が人類一般に與へたる乳母なり。彼女は孤立助け無き者を引受けて、兒童を撫育するものなり。女子は家庭の主任にして、品性の養成發育に適當なる平和と満足との大氣を作るべきものなり。女子は天性情深く、柔和にして、忍耐強く、且つ克己的なり。其眼は愛と希望と親切とに充ちて、到る處に輝き、冷を照らして、暖となし、苦痛を和らげ、悲哀を慰むるものなり。

女子の愛情

“Her silver flow

Of subtle-paced counsel in distress,

Right to the heart and brain, though undesired,

Winning its way with extreme gentleness

Through all the outworks of suspicious pride.”

愛は鼓吹者なり慰籍者なり

女子は「不幸者の天使」なりと云はる。即ち能く弱者を助け、失敗者を鼓舞し、苦しむ者を慰むるものなり。病院の創設者が女子なりしは、確かに女子の特色を現はす事實なり。人が失望の嘆聲を發つ時、女子は常に其側に來りて之を慰む。マンゴパークが亞弗利加に於て、土人の爲めに逐はれ、單身五尺の軀を寄するに所なく、飢餓に迫りて、雨に露され、野獸の餌となるも、運を天に任して、樹下に氣息奄々として倒れたる折柄、野仕事を終りて家路に就ける、土人の一婦人、此處を横ぎりて、惻愷の情を起し、吾家に伴ひ歸りて、甲斐々々しく食を與へ、まめやかに介抱したりと云ふ。

女子の特色は、同情と愛情となりと云ふと雖も、自修、自頼、及び克己によりて品性を發達し強むることは、獨立の人間として、女子自身の幸福に必要な

り。然し情の美しくしき通路を防塵するは宜しからず。自頼は、人間の同情に城壁を設くるものにあらず。然れども、女子の幸福は、男子の如く、多く品性の圓滿に屬す。智力の適宜なる教育より生ずる所の獨立心は、情及び良心の適當なる訓練と相待ちて、女子を人生に有用ならしめ、幸福ならしむ。

社會の純潔を維持する爲めには、男女兩性の教化を同一程度に調和せざるべからず。純潔なる女子は、純潔なる男子に添はざるべからず。道德上の規則は、男にも女にも同様に適用すべきものにして、性の相違を口實に、男子の亂行を放過し、獨り女子の敗徳を咎むるは、道德の根柢を弛ゆるものと謂はざる可からず。故に、社會の純潔有徳なる状態を維持するには、男も女も純潔に且つ貞操ならざるべからず。二者各々同様に、情品性及び良心と衝突するが如き一切の行爲を避けんことを要す。即ち、之を避くるは、猶ほ毒を避くるが如くすべし。一たび之に感染するときは、復た根治することを得ず、多少未來の幸福を薄くするなり。

茲に吾人は一の微妙なる問題に遭遇す。此問題は、一般的にして、甚だ趣味

あるものなれども、道德家、教育家が蛇蝎の如く忌み、父母の忌避する所のものなり。男女兩性の戀愛を口にするは、人の忌諱に觸るゝが故に、世の青年男女は、單に戀愛小説より、戀愛に關する智識を蒐集するの一法を有せるのみ。戀愛は、造物主が靈妙なる目的を以て、女子の全生活及び歴史を彩色し、男子の生涯の一部分を有興味ならしめんが爲めに作りたるものにて、誰れ教ふるとなく、自然に發達するものなり。

自然は戀愛に關して、一切の形式的規則及び方向を示さずと雖も、戀愛は確かに青年をして眞偽を辨別し、道德的純潔及び清淨の性質を尊重せしむるが如き品性の觀念を、彼等の心に與ふるものなり。戀愛の方法は、青年男女に教へ難きも、父母の注意によりて、少なくとも、戀愛の名を汚す所の淫逸なる情慾を防ぐことを得べし。『通俗の字義に所謂戀愛は痴愚なり。然れども、純潔清淨無私なる戀愛は、吾人が道德堅固の結果たるのみならず、亦其左券なり。道德的美に感ずること、及び其感動より起る没我は、全く高尚なる道德の力を要す。そは、吾人が天性の利己的分子に對し、利己的ならざる分子の勝利

と謂ふ可し』との説は、大に我が意を得たるものなり。

戀愛あるが爲めに、世界は常に斬新なり。戀愛は、人情の永久的音楽にして、青年に光輝、老年に後光を與ふるものなり。そは、背後に發つ光に依りて現在を照らし、前方に發つ光によりて未來を照らす。戀愛は、尊敬と感動との結果なるが故に、品性を高め清むるの力あり。又人をして自我の念を没却せしむ。戀愛は醜にあらずして貴きものなり。溫和、同情、相互の信仰及び信任を促すものも、戀愛の力なり。眞の戀愛は、或る程度まで、智力を増進す。詩人ブラウニング曰く、『總て戀愛は多少人を賢ならしむ』と。而して、偉人は皆誠實なる戀をなしたる人なりき。偉大なる精神は、一切の愛情を高尙ならしめ、一切の眞の快樂を高め、且つ神聖ならしむ。戀愛は熱望を高め、精神を擴げ、心力を刺戟す。婦人に捧げたる讚辭多き中にも、最も有名なるは、スチールのエリザベス・ヘスティング嬢を讚せるものにて、其句に曰く、『彼女を戀せしことは、一の自由教育なりき』と。此點より觀れば、婦人は最良なる教育者なり。蓋し他の教育家よりも、愛情を以て教育するが故なり。

男も女も戀を知るまでは、人生の經驗を完うせしものと謂ふべからずとは、古來人の能く言ふ所なり。戀を知るまでは、女も未だ女にあらず、男も未だ男にあらず。されば、男も女も其圓熟の爲めに、相互に必要なものなり。プラト一の説に據れば、戀人は互に類似を求むるものなりと。然し、此説は誤れり。何となれば、愛情は其目的の同じからざる折にも起ること屢々なればなり。眞の戀愛は、心も情も一つになる時に成立ち、相互の尊敬并に相互の愛情を基礎とす。哲學者フヒテ曰く、『尊敬なければ、眞の戀愛、永久の戀愛は成立せず。實際人は惡人を愛することを得ざれども、尊敬し感嘆する或るものを愛するものなり。簡單に言へば、眞の戀愛は、品性の上に休むものなり。品性は公生涯を支配する如く、家庭的生涯を支配す。』

然し、男女間の戀愛には、尊敬以外に、尙ほ一層有力なる或る者あり。甚だ幽玄微妙なる感情にして、決して男同士の間にも、女同士の間にも成立するものにあらず。ホーソン曰く、『男同士の間には、愛情に關して常に一の越えがたき深あり。彼等は決して握手せず。故に男は男より、或る親密なる助力、或る

慰藉を受くることなく、女子即ち母、姉妹、或は妻より、之を受くるものなり」と。
男子は戀愛の門を通過して、歡喜、同情及び人情の新世界に入るものなり。
彼は此處に家庭と云ふ新世界に入る。そは彼自身の經營せる家庭にして、少年時代の家庭とは全然異なる。彼は亦恐らく困難、悲哀の新世界に入るならん。此處に彼は屢々最良なる教化及び訓練を受く。セイン・パーブ曰く、「家庭生活は、荆棘と苦勞とに満てり、されども、良果を結ぶものなり。其他のものは皆枯れたる荆棘なり」と。又曰く、「子供の無き家庭は、痴愚と罪惡とに満てるを常とす」と。

事務に忙殺せらるゝ人の品性は、猜疑、狹量に傾き易し。之を矯正するものは家庭なり。利益と云ふ點ばかりに思想を集中せる精神は、家庭に入りて初めて、爽快と休憩とを得るものなり。詩に曰く、

忙はしき人を照らすものは、
交際の樂しみの、まことの、得がたき、光なり。

ヘンリー・テラー曰く、「事務は人情の砲臺を破壊せんとし、結婚は之を防

禦す」と。如何に大志を抱きて、事務に勤勉力行するとも、心に一點の愛と同情の温みなければ、人生は恐らく成功を見ることなく、全然失敗に終らんのみ。
男子の品性は、家庭に在る時、最も能く表はるゝものなり。其實用の才は、公務、或は職業の如き、大規模の事務よりも、家庭内に於ける動作の上に、能く表はるゝものなり。職務の爲めに、全力を傾注するは、固より當然なりと雖も、一身の幸福を希は、必ず心を家庭の上に注がざるべからず。人は家庭に在りて、眞面目なる性質を暴露す。誠實、愛情、同情、正直、勇氣の如き、換言すれば、品性は、最も眞摯に、家庭内に於て表はるゝものなり。愛情が家庭に於ける根本主義にあらざるときは、家庭生活は專制的となるべし。正義と云ふものあらざれば、家庭の規則の根本たる愛も、信用も、尊敬も無きものとならん。
エラスマスは、サア・トーマス・モリア將軍の家庭を「基督教の學校なり」と評し、且つ曰く、「其處に爭論及び怒りの聲を聞かず。一人の怠惰なる者なく、各自熱心に其本分を盡くし、一家は常に和氣霽々たりき」と。モリアは温厚なるが故に何人も心服したり。彼は家庭の事に最も意を注ぎ、愛と職分とを以て終

始するの良風を作りたり。彼は家族の人々と時々刻々、親切なる行爲の交換を獎勵したるが、こは即ち彼の公生涯を異彩あらしめたる特色なり。家庭生活に依りて愛情を濃かならしめたる人は、亦同情の念に富むものなり。彼の家庭に於ける愛は、外に發して世界に於ける博愛となる。エマソン曰く、「愛は火なり。一人の心の奥に燃ゆる火の子は、飛んで他人の心に潜める材木に移り、次第に火勢を強くして、世界一般の男女を暖め、焔を以て天地を照らす」と。

人の心を統治するものは、家庭の愛情なり。家庭は女子の王國なり。國家なり。世界なり。彼女は愛情と親切と溫和の力とを以て、此王國を支配す。高尚なる女子との結婚ほど、男子の天性を沈靜せしむるものあらず。男子は此處に精神の慰安及び平和を得。彼は亦彼女を最も信頼すべき相談相手となし得べし。蓋し女の本然的機智は、能く男子の邪路に走るを防ぐが故なり。困難不幸に遭遇する時、最も恃むべきものは良妻にして、良妻は危急存亡の場合に、決して同情と慰藉とに缺乏する者にあらざるなり。青年時代に於て妻は男

子の玩弄物なり。壯年時代に於ては、忠實なる助力者なり。

「吾家に歸ると忽ち一切の苦勞を忘る」と言ひたるエドマンド・バークは幸福なる男ならざるべからず。ルーテルも嘗て「クレーサスの富も、我妻には換へ難し」と言へることあり。又結婚を論じて曰く、「神が男子に與へ得る所の最大幸福は、善良にして敬神なる妻を所有することなり。彼は平和に安寧に彼女と同棲するを得べし。彼は生命財産は勿論、一切の所有を彼女に託することを得べし」と。又曰く、「早熟早婚して後悔せる人は未だ嘗て有らざるなり」と。

結婚に依りて平和と幸福とを得んと欲せば、男子は相談相手并に助手として、其妻を待たざるべからず。然れども、妻は必ずしも良人を眞似るの要なし。男は男らしき女を妻とするを好まず。女子の良性は、智力に在らずして、愛情に在り。女子は其才智よりも、同情によりて、生氣を與ふるものなり。ホルムス曰く、「智の女は、情の女ほど吾人を利するものにあらず」と。男は男同士にて、趣味を有せず。これ寧ろ自然的傾向なり。ヘルプス曰く、「人若し、予に神の靈妙なる證據如何と問はば、男女の心の微妙なる差異を見よと答ふるを憚らず。

斯くて、男子が想像するが如き楽しき交際は成立し得るなり」と。男子は女子の智力の爲めに女子を愛するにあらずと雖も、女子の智力を進歩せしむるは、女子に取りて不必要にあらず。男女の品性には、差異あるべけれども、心と感情との調和なかるべからず。詩に曰く、

相談も夫婦、爐邊にも夫婦。

世間の手前も夫婦。

内輪の事にも夫婦。

長妻の資格

サア、ヘンリー・テラーの結婚論の如く、正鵠を得たるものはあらざるべし。政治家の成功と幸福なる結婚との關係に就きて論じたる氏の説は、如何なる境遇の人にも適用するを妨げず。其説に曰く、良妻とは、家庭を休息場と成し得る資格を有せるものならざるべからず。此目的を完うせんには、妻は家庭管理の面倒特に負債の爲めに、成るべく良人に累を及ぼさざらんを要す。妻は良人の眼及び趣味に適せざる可からず。趣味は如何なる男子の性質にも深く入るものにして、愛は之より離るゝものにあらず。脳髓の安息、精神の平和は、唯愛情の慰籍に依りて得らるゝのみなるが故に、愛の無き家庭は

休息場たるの資格なし。鋭き才氣は、疲労せる男の家庭には、餘りに刺戟に過ぎ、熱情は却つて混亂せしむるものなり。

“Her love should be

A love that clings not, nor is exigent,

Encumbers not the active purposes,

Nor drains their source; but prefers with free grace

Pleasure at pleasure touched, at pleasure waived,

A washing of the weary traveller's feet,

A quenching of his thirst, a sweet repose,

Alternate and preparative; in groves

Where, loving much the flower that loves the shade,

And loving much the shade that flower loves,

He yet is unbewildered, unenslaved,

Thence starting light, and pleasantly let go

When serious service calls.”

結婚して失望する人あり。そは結婚に餘り多くの希望を屬したるが故なり。然し、夫婦の間に愉快、親切、寛容及び常識の缺乏する爲めに、結婚に失望する者は更に多し。彼等は、恐らく、此世に於て實行し難き理想を抱きて、結婚す

れども、煩雜なる實生涯に入るときは、忽ち南柯の一夢と過ぎ去るなり、彼等は其配偶者を圓滿に近きものと思へり、而して經驗に依りて、幾多の弱點あるを發見す。寛容と同情とを最も要求するものは、天性の圓滿よりも、寧ろ不圓滿なり。夫婦を最も能く和合せしむるものは、愛情と感情となり。

夫婦間の根本要素は、『堪忍と寛容』なり。結婚は政府と同様、讓歩の行列なり。禁止束縛を興へざる可からず、受けざるべからず、又忍ばざる可からず。互の失敗を黙過する能はずとも、少なくとも、寛恕せざるべからず。凡ての性質の中に、夫婦の間に最も必要なるは寛仁なり。寛仁と克己とが結合すれば、即ち忍耐となる。詳言すれば、堪忍し寛容し、激昂憤怒を抑ゆるの辛抱なり。柳は風に逆らはず、『穩なる答は怒りを轉ず』とは、結婚に於ける最も適切なる格言なり。

詩人バロンスは、良妻の資格を十分し、其四分を寛容、二分を明斷、一分を頓才、一分を美愛嬌、物言ふ眼光、品位、姿態の如き美に與へ、残りの二分を財産、教育、血統等の如き、妻たる他の資格に與へたり。而かも尙ほ彼は附言して曰く、

『此等二つの等級を分つは、各自の勝手なれども、凡て此等の小なる比例は、分數にて表はさざるべからざるものなることを忘るべからず。蓋し、彼等は何れも整數の資格あるものにあらざればなり』と。

女は、網を造ることを知れば、即ち足ると云はる。然れども、其上に籠を造ることを知れば、更に妙なり。男は容易に捕へらるゝものなれども、亦能く逃げる者なり。妻が家庭を良人の幸福なる安息場と爲すことを得ざるときは、神は、此憫むべき男を救ふ。蓋し斯の如き男は、實際三界に家なきものなればなり。

賢者は妻を選ぶに容貌の美を主眼とせず。美人は當初こそ甚だ人の心を動かすものなれども、後日に至りて、比較的面白からぬ結果を來たす。外形の美は勿論卑しむべきものにあらず。何となれば、美貌美形は、健康の表現なればなり。然れども、品性なき美人、即ち心の美しくしからざる美人を娶るは、最も惜むべき過失なり。美しくしき景色も、毎日眺めては、單調無味となる如く、心の美しくしからざる美人は、厭の來るものなり。今日の美は明日の平凡となる。十

人並の容色に、婦徳を備へたる女は、何時見ても可憐なるものなり。加之ならず、此種類の美は、年と共に進み、衰ふるよりも却つて若やぐものなり。最初の一年を過ぐれば、夫婦は互に其容貌を氣にするものにあらず。然れども、彼等は決して互の氣質を誤解することなし。アヂソン曰く、「予は氣六つかしき顔色の男を見る毎に、其妻を氣の毒に感ず。而して、温厚宏量なる風采の人を見れば、彼の朋友、家族及び親族の幸福を聯想するを常とす」と。

予輩は前に、良妻の資格として、詩人バインスの意見を引用したり。其追加として、左に政治家并に實務家として、人生の經驗に饒かなるパーレー卿の、其子を戒めたる訓言を掲げん。曰く、「汝若し一人前の人間となる時は、妻の選擇に注意せよ。結婚は男女一生の一大事にして、未來の幸不幸の繫かるところ。一たび之を誤れば、再び取返しつかざるは、猶ほ戰略を誤りたるが如し。……能く彼女の性質を研究し、其兩親の養育法に留意せよ。門地如何に善くとも貧しき女は妙ならず。何となれば、男は上品を以て市場にて買物することを得ざればなり。さりとて、財産ばかりにて悪性の醜婦は好ましから

妻の道徳
的感化

ず。何となれば、そは他人の侮辱を招き、汝の怨恨を來たすが故なり。又侏儒や馬鹿も選むべからず。何となれば、前者は侏儒の子を生み、後者は永久汝の恥辱となればなり。愚なる女房ほど不愉快なるものはあらず」。

男子の道徳的品性は、著るしく、妻に依りて感化せらるゝものなり。下司の女は、男を下品ならしめ、上品なる女は、男を高尙ならしむ。前者は、男の同情を没し、精力を消耗し、生涯を墮落せしめ、後者は彼の愛情を満足せしむるが故に、其道念を強め、慰安を與ふるが故に、其智力を増進せしむ。豈に管に然るのみならずや、良妻は、良人の志望を遠大ならしむるも、凡婦は、知らず識らず、彼を腐敗せしむるものなり。デトックヴァイルは、最も深く此道理を感じたる人なり。彼は良妻を有する人の生涯は安全なりとの説を主張せり。其言ふ所に據れば、熟ら世の様を見るに、品性弱點多き人にして、能く公德を完うする者あり。こは蓋し其妻が品性高き女にして、彼の行爲を拘束し、其職分に對する

デ・トック
ヴァイル

意見を以て、大なる感化を與ふるが故なり。之に反して、天性の非凡なる人が、品性の下劣なる女を妻とせし爲めに、野卑なる利己主義の人となること、其

例亦少からず。こは其妻が快樂の愛に心酔して、職分と云ふ大動力を心に有せざるが故なりと。

而してトックヴァイル其人は、良妻を得て幸福を感じたる好運見なりき。彼は其親友に寄せたる書翰中に、彼女の忍耐の勇氣、氣質の沈着及び品性の高潔より受くる所の慰安及び幫助に感謝の意を述べたり。彼は社會及び生活の經驗を如ふるに従ひ、益々健全なる家庭の狀態が、男子の道德の進歩に必要なることを感じたり。殊に彼の結婚が男子の幸福に必然的要件なることを悟れり。而して彼は、自己の生涯に於ける一大美事として、自己の結婚を例證するを常とせり。曰く、『多くの幸福なる外部の事情は、予に與へられたり。就中予が最も神に謝する所は、人生幸福の第一たる眞の家庭の幸福を有することなり。予が年齢の進むと共に、其昔青年時代に放過したる予が生涯の部分は、毎に予が眼に必要なものとなり、今日に至りては、他の何者よりも、最も善く予を慰むるものとなれり』と。又莫逆の友デケルオアレーに寄せたる書中に曰く、『神が予に與へたる一切の幸福の中にて、予の眼に最も大なりと

見ゆるものは、メリーの上に輝けるものなり。足下は彼女が如何に苦心せるかを想像し得ざる可し。彼女は常に温和なれども、一たび困難に遭遇せば、忽ち脱兎の如くなる。予の知らざる間に、彼女は予を監督せり。予一身に關せる困難に際して、彼女は予を慰め、予を和らげ、予を鼓舞す』と。又他の書翰の中に次の如く言へることあり、曰く、『予は一婦人との平素の交際より結局得たる幸福を足下に名狀すること能はず。其婦人の心には足下の善となすものは、自然に備はり、更に改良さる。予は自ら正しと信ぜる事を言ひ、或は爲す時は、直ちに彼女の顔色に満足の色を見、それが爲めに力を得、而して予の良心が咎むるときは、直ちに彼女の顔色曇るを見る。予は彼女の心に大なる勢力を振へども、彼女は予を畏れしむるものなるを喜ぶものなり。而して、今日の如く予が彼女を愛する間は、予は決して悪風に感染せらるゝことなしと確信す』と。

デ・トックヴァイル政治界を勇退し、文學者として其餘生を送るや、健康著るしく衰へ、病弱神經質となれり。彼が最後の著書『古代政治と革命』の著述中、彼

は次の如く書きたることあり、曰く、『五六時間も机に凭れば、最早筆を執る能はず。機能は働くことを拒むなり。予は安息、永き安息を急務とす。足下若し著述の苦心を知らば、即ち極めて悲慘なる生涯を想像することを得ん。若し予にメリーの慰藉なければ、予は著述に従事することを得ざらん。予自身の性質と幸福なる對照を形づくるべき性質を求むるは不可能なるべし。予の病氣及び神經質に對し、彼女は「天使なり」と。

メリーも、幾度か轉變、浮沈、失望の悲境に際し、常に其尙むべき妻に依りて、幫助せられ、鼓舞せられたり。政敵の迫害に窘める時、彼の慰藉は、其家庭に日光を満たしめたる愛情の上に在りたり。彼の公生涯は、活氣あり、刺戟あるものなりしも、彼は之を以て冷々、淡々、無味となし、精神の擴充、品性の陶冶に毫も影響あらずとなせり。彼の備忘録中左の如き記事あり。曰く、『人は事業の成功及び社會の尊敬より來る幸福よりも、更に充分なる柔和なる幸福を憧憬す。予が生存競争を終りて今日あるは、既に豫め期する所なりき。大事業の計畫中に於てすら、家庭の愛は生命の基礎なり。若し家族及び朋友との幸福な

ギゾー

る關係なければ、功名赫々たる行路も、何の樂みかあらんや」と。

ギゾーの結婚事情は、趣味深き奇談なり。彼は巴里の青年文士として、著述、評論、翻譯を以て生活をなしける頃、偶然『プブリシスト』誌の主筆たる閏秀ボウリン・デ・ミウラン嬢と相識るに至れり。家事上に不慮の一大災厄ありて、ミウランは病蔭中の人となり、一時其雜誌に筆を執ること能はざりき。弱り目に崇り目とも云ふべき此急場に當りて、一日無名の書翰、彼女の枕頭に届きたり。怪みて之を見れば、『プブリシスト』誌の爲めに、原稿を呈供せんとの文意なり。果して原稿は、期を愆ることなく送達せられ、直ちに上梓の運びとなり。其論題は、美術、文學、演劇、社會評論等頗る多方面に涉りぬ。ミウラン嬢病癒ゆるに及びて、無名の投書家は、自ら假面を脱いて名乗り出てぬ。是れ即ちギゾーなりき。是に於て、親密なる交際を結び、遂に相思の愛情成立し、久しからずして、才士名媛は合衾の式を挙げたり。

爾來彼女は彼と苦樂を共にし、夫婦轡を列ねて、文壇に馳驅したり。結婚前の事なるが、彼は其運命の變徵を自覺せしかば、彼女の心を確かめんとて、彼

が運命の轉變によりて、心變りすべきや否を問へり。彼女は常に彼の成功を祈り居るも、一朝失敗すればとて決して嘆息せず心安かれ、と答へぬ。ギゾーが、ルイ・フロップの第一次内閣に入るや、彼女は書を其友に寄せて曰く、「余は今となりて、初めて夫が余の豫想せしほどにあらざりしを知りぬ。されど、余は尙ほ彼を解す。……天若し、我等夫婦に餘命を授けたまはば、如何なる艱難恐怖の渦中に在るとも、余は人間中の最大幸福なる者ならん」と。悲むべし、此語箴をなして、未だ六ヶ月を経ざるに、彼女は、無情の風に誘はれて、秋の木の葉と共に散り失せぬ。夫ギゾーは、悲嘆の涙に暮れながら、覺束なくも、一人淋しく人生の旅路を辿りぬ。

美は芙蓉の水を出てたるが如く、心は高峰の雲の如く、情は渡津海よりも深き、絶世の佳人ヌーゼントと偕老同穴を樂みたるパークは、古今無數の幸福者なり。其政治家としての慘澹たる苦心經營は、實に言語に絶せしと雖も、家庭の幸福に依りて慰められ、練々として餘裕ありき。パークが好んで口にせし次の語は、能くパークの本領を示して餘りあるものなり。曰く「家庭の愛

パーク

は博愛の本なり」と。彼の若き愛妻の記は、恐らく詞を以て畫きたる人物畫中の傑作ならん。其記に曰く、

「彼女は美人なり。但し容貌姿態形狀の美にあらず。彼女は他に優りて此三者をも備へたり。されど、彼女が他人の心を動かすは此等にあらず。即ち彼女の美を形づくれる所の容貌が表はし得る、氣質の優しきこと、仁惠なること、無邪氣なること、感情に強きこと、是れなり。彼女の容貌は、一見汝を動かし、見れば見る程、いや増せども、怪むべきは恍惚の度、最初と異なるなきことなり。彼女の目色はやさし。されど、亦人を畏縮せしむることあり。そは、職務外の人如く、職權によらず、徳によりて、支配するものなり。彼の背は高からず。彼女は人の驚嘆に値ひすべく作られたるにあらずして、幸福に値ひすべく作られたるなり。

彼女は氣丈の女なり。されど、優美を失はず。彼女は缺點なき柔和を有せり。彼女の音聲は、軟音低調の樂の如し。公衆の前に奏づるに足らざるも、一人靜かに之を聽けば、思はず人をして恍惚たらしむ。そも亦一得なり。汝若し聞

かんと欲せば、彼女の側近く来るべし。

彼女の身體は、其心の反射鏡なり。彼女の悟性は多藝と謂ふべからざれども、選擇に長ぜり。

彼女に奇警なる事を言ひ、或は行ふの才氣なし。但、斯の如き言行を慎しむの徳あり。

同じ年輩の人にて、彼女ほど世間を知れるものなく、彼女の如く世才の爲めに誤まられざるものなし。

彼女が應接に巧みなるは、素と自然に出づ。禮儀作法の規則に拘泥するに
あらず。故に禮儀ある人にも、無骨なる人にも敬せらる。

彼女は女子に似氣なき確乎たる精神を有す。彼女は男子中の大人物にも劣らざる道念を有す。彼女は非凡の美を有す。通常美人に見る所の缺點も、彼女に在りては、却つて愛嬌となる。』

予輩は茲に、女子の手に成れる良人の記を引用して、パークの妻の記に對照せしめんとす。そは、コロネル、ハッチンソンの未亡人の記事なり。ハッチン

ハッチン
ソン

ソンは、死に臨み、死生は命なれば、予亡くなればとて、世の常の女子の如く、嘆き悲む勿れと、其妻に言ひ含めたり。されば、彼女は固く其語を守り、女々しき振舞に取亂すことなく、想ひ出の記に、良人の悌を寫して、自ら空聞の寂しさを慰めたり。

彼女が『生涯』と題せる書中に寫し出せる、良人としてのハッチンソンの人物は左の如し。

『妻に對する彼が夫婦の愛情を見れば、何人も貞節、親切、宗教の一原則を、其れより歸納せんと欲するなる可し。果して然かせんには、彼の例を正確に寫し出すを最も至當とす。女子を愛すること彼の如く切なる人なく、女子を尊敬すること彼の如く大なる人なし。然れども、彼は妻の愛に溺るゝ者にあらず。亦妻の尻に敷かるゝ如き良人にあらず。唯能く、思慮と愛情とを以て、其妻を待てり。斯の如き良人に從順ならざる女は、淺慮なる女なり。』

彼は説服を以て統御の方針としたり。彼女に尊敬すべき且つ適當なる者の外には、決して此主義を用ひざりき。彼は、彼女の外形よりも、彼女の精神と

節操とを愛したり。加之ならず、彼は妻の愛に溺るゝ愚者の通弊たる一時的情慾に驅らるゝことなく、能く妻の外貌を看過せり。若し彼が彼女の眞價以上、彼女を尊敬したりとせば、彼女は唯彼の上に彼自身の光榮を反射せしに過ぎずして、彼は愛に溺るゝと云ふ徳の創造者たるものなり。彼女は、在るが爲めに生きるの甲斐ありたり。今日彼女の存命せるは、畢竟彼の俤を偲ぶに他ならず。

彼が彼女に寛大なりしは、財布の破損を口にするを好まず。其財産を彼女の使ふがまゝに放任して、勘定書に眼も通さぬ一事を見ても知らるべし。彼の愛情は終始渝はる所なく、彼女の色香衰へてより、彼の愛は最も濃厚となれり。其愛情の深さは、逆も言語の盡くす所に非ず。彼は男子の節操を守り、偶像としてにあらざり、同等の人間として彼女を愛せり。されど、職分と云ふことを本とせる彼の愛情は、常に世の不正なる感情に打勝ちたり。されば、彼の神を愛することは、彼女に勝り、而して其他の一切の情慾は、彼の名譽の爲めに、惜氣もなく見棄てぬ。』

ラッセルの妻

ラッセルは、妻としての獻身及び貞節を以て歴史に著名なる婦人なり。彼女は女の節操の許す限り、良人の冤を雪ぎ、刑戮を免れしめんと、千々に心を碎き、種々の手段を盡くせしが、其徒勞に歸するを見るや、勇を鼓して、潔よく斷念し、せめては良人の最期に未練の耻辱を殘さざらんやうにと、心強くも彼が決心の臍を固めたり。愈々夫婦が一世の別れの時迫るや、妻及び愛兒等は、愛國者ウィリヤム・ラッセルが最後の懷抱を受けんとて、刑場に控へたり。一圖に良人の潔よき最期を氣遣へる彼女は、其心を鬼にして、強ひて沈着なる態度を示しぬ。悽愴の氣天地に満ちたり。良ありて、彼等は無限の情を不言不語の間に置めて、袂を分ちぬ。彼女の去り行く後姿を眺め、ウィリヤムは、思はず』さて、死の苦痛は過ぎぬ』と獨語せり。

パンヤンの妻

吾人は、既に男子の品性に及ぼす妻の感化力を論じたり。世に妻の陋劣なる品性の感化力に能く抵抗し得る男子は、極めて罕なり。妻にして男子の天性の最も勝れたるものを維持し、且つ高むることを得ざれば、彼女は速に彼女自身と同一水平線上に、彼を下落せしむるものなり。故に妻は男子の品性

の製造人たり、或は破壊者たるものなり。バンヤンの生涯は、之を説明して餘りあり。放蕩に身を持崩したる鑄掛師は、幸運にも善良なる父母ある心さま正しき一婦人を娶りぬ。請ふ少時、バンヤン自らの言ふ所を聴け。曰く、「予は、圖らず信心家を父母とせる妻の恩澤に浴せり。此婦人と予とは、貧乏同士水入らずの夫婦となれり。然し、彼女の方には、父の遺物たる、ゼ、プレーン、マンズ、バ、スウェイ、ツ、ヘブン及び、ゼ、ブラクチス、オブ、バイエチー」と云ふ二冊の書ありたり」と。此良妻の感化によりて、バンヤンは、此等の書籍及び他の良書を読み、漸次に前非を後悔して、平和の行路を辿るに至りたり。

非國教論の主張者たりし、英國の神學者リチャード・バックスターは、其妻となるの縁を有したる一閨秀と相識りし時には、既に高年の人なりき。宣教師たるの職務に心を専らにして、求婚を顧みるの餘裕なかりしなり。彼の結婚はカルヴァインの場合と同じく、戀愛より起りしにあらずして、便利の問題より起りたるなり。其妻に當選したる婦人、名をシャルトンと云ふ。其名義に屬する財産萬を以て數ふべし。然れども、彼は其財産を目的に結婚したり

バックスターの妻

と、世に誤解せらるゝを厭ひ、三個の結婚條件を呈出せり。其第一に曰く、財産の大部分は彼女の親戚に分ち與ふ可し。彼は結婚前の彼女に屬する財産を一厘たりとも所有することなし。其二に曰く、後日訴訟事件の面倒に彼を連累せしめざるやう、彼女が一身の諸事を整理し置くべし。其三に曰く、彼をして公務を懈らしむるが如きこと無きを要すと。以上三個の條件は、直ちに新婦の承諾する所となりて、結婚式は舉げられ、幸福なる結婚の一たることを證明したり。バックスター曰く、「我等夫婦は、互に思ひ合ひ、助け合ひ、風波なくいと睦まじく十九年間暮らしたり」と。然れども、國家多事の際なりければ、バックスターの生涯は、非常なる艱難の一生なりき。彼は國中所々に流轉して、多年一定の住處を定むるの餘地なかりしなり。彼自ら記して曰く、「婦人といふものは、斯の如き苦勞を厭ふものなれども、わが妻は能く辛抱したり」と。結婚第六年目に、アクトンに於て國教違犯の教會を設けたりとて、ブレントフオード地方廳に召喚せられ、審問の結果クラークンウエルの獄に繋がれぬ。彼の妻も亦連累者として、縲紲の苦を共にせり。バックスター、後ち人に語り

て曰く、『在獄中の如く、彼女が予に取りて、愉快なる伴侶たりしことなし、而して、之が爲めに、予は宥免を願ふと云ふ念を起さざりき』と。然し控訴の結果、彼は無罪を宣告せられ、再び晴天白日の身となりしが、艱難なれども、而かも幸福愉快なりし十九年の偕老同穴の契りを全うして、彼女は良人に先ちて、白玉樓中の人とはなりぬ。此賢婦人の品性は、良人バックスターの筆によりて、後世に其俤を留めたり。

似た者夫婦と云ふ諺に洩れず、品性の高潔なりし澳國のチンチェンドルフ伯の夫人は、良人と同じく品性の高き貞女なりき。彼女は其勝れたる精神に依りて、彼の一生を鼓舞し、其勇氣に依りて、彼の事業を援助したり。伯語りて曰く、『二十有四年間の經驗は、予の有せる内助者が、予の職分を全うせしめたる唯一の者たることを、予に曉らしめたり。其人以外に、誰か能く斯の如く予の家事を整理し得んや。誰か斯の如く瑕瑾なく世を渡り得んや。誰か能く予をして惡徳の誘惑に抗爭せしめ得んや。……彼女の如く、怨言なくして海陸の危険を冒せる良人を待つ者、天下果して幾人ありや。斯の如く驚く

べき遍歴に、良人に従ひて苦樂を共にせし婦人ありや。斯かる辛酸の中に在りて、自若として、予を内助せし者果して何人ぞ。……扱て最後に、世界中に、彼女の如く、予の精神及び行動を、精神の高潔非凡の學識及び予も及ばぬ信仰心とを以て、外界に紹介せし者あらざるなり』と。

亞弗利加探検中、ドクトル、リヴェングストンの遭遇せし不幸の中にも、最大なる不幸は、愛妻の死なり。彼女は人の怖るゝ熱帯の山野に、天變地異、蠻人猛獸の危険を、良人と共に分ちつゝ、多年の辛苦に堪へたる、稀代の烈女なり。ザンベジ河の邊、シユパンガより、彼女の計を、リヴェングストンが、其友人サア、ロデリック、マーチソンに報せる書に曰く、『彼女の死は、予を失望落膽せしめたる、一大打撃なることを、予は、自白せざる可からず。從來遭遇したる不幸は、皆予をして、益々志を堅うせしむるものなりき。然るに一朝、此悲しき打撃を蒙りてより、予は、全く勇氣の沮喪せしを感ぜり。四年間の別離の果ては、同棲を樂むこと、僅に三閱月のみ。噫、予は戀愛の餘りに、彼女と婚したり。而して彼女と共に生きること長ければ、其れ丈け予の愛は加はりぬ。彼女は良妻な

りき。又勇氣あり慈愛深き賢母なりき。我等の送別會にて、コロベンダに於ける地方の兒童及び我子の教育に關し、足下が彼女に與へたる稱讚は、總て彼女に適せり。予は此大打撃をば、天意と思ひ諦らめんとす。……予は尙ほ予の職分を爲す可し。然し、再び初めたる予の職分は、實に暗き地平線の上に在るものなり」と。

ロミリーの妻

サア、サミュエル・ロミリーは、自傳に其妻の事を記し、其成功は、彼女の内助に依る所甚だ多きを言へり。曰く、「過去の十五年間、予の幸福は、當今妻女中の最も勝れたる余の妻に負ふ所なり。彼女は聰明なる智力と、高潔なる感情と、最も大なる忍耐力と、最も温かき愛情と、最も優しき心とを併せ有したる婦人なり。而して此等品性上の圓滿は、天下に匹なき容貌の美麗姿態の輕盈を以て大に其光彩を添へたり」と。斯の如き高尚なる良妻に對する、ロミリーの愛情と敬嘆とは、始終變はる所なかりき。故に彼女の死に當りて、彼の悲嘆は常人に超ゆるものありたり。彼の臉は閉ぢられたり。されど、彼の心は彷徨へり。彼女の死後三日にして、冥途の旅に、彼女の後を追ひ行きしもの、豈に偶然

ならんや。

バーデットの妻

政治上に於て、ロミリーと意見を異にしたるサア、フランシス・バーデットは、妻を失うて、悲嘆の餘り、食を絶ち、遂に其柩の未だ門を出でざるに、冥府の旅に赴きぬ。夫婦の死屍は、同じ日、同じ墓の下に、枕を列べて葬られたり。

グラーム

四十三歳のトーマス・グラームをして、慨然孤劍を提げ、身を軍旅の間に投ぜしめたるものは、亡妻哀悼の熱情なり。畫家ゲイス・ポローの筆に成れる、若きグラーム夫人の肖像は、天下の絶品として、何人も能く知る所のものなり。彼等は鴛鴦の翼を比べ、連理の枝を重ねること十八年なりしが、惜むべし。彼女は、寂滅爲樂と響く鐘の音に誘はれて、無情の風に散り果てぬ。グラームは、身も世もあらぬばかりに嘆き悲しみしが、愛を忘れ孤枕の寂寞を慰むるの縁にもと、志を決し、義勇兵として、フッド卿の軍に屬し、ツィロンの攻圍戰に、剛勇の名を敵味方の間に轟かし、後、或はモリアの麾下に屬し、或はウエリントンの部將となりて、半島戰爭に従軍中、功を以て異數の累進をなし、遂に半島軍副總司令官の重職に上れり。パロツサの役に空前の大勝を得たりし

が故に、世人彼を呼ぶに、パロツサの英雄の名を以てせり。平和克復の後、光榮を樂みて天命を終れり。朝廷即ち其功勞に報ゆるが爲めに、ロールド、リネドックの爵位を追贈せらる。然れども、彼は死に至るまで、亡妻の俤を偲び、一切の功名榮譽を彼女の賜に歸したり。シエリダンは、下院に於て、其哀悼演説に「彼の如き氣高き精神を有せし勇士は、決して決して有らざる所なり」と言へり。

斯の如く良妻は、良人をして追慕せしむるものなり。奥都ヴィエンナに有名なる陸軍大將の記念碑あり。其碑文は七年戦争に於ける偉功を叙したるものなるが、其結末に「國家も帝王も、妻ほどの力なかりき。」の一句あり。サア、アルベルト・モルトンの死するや、其妻之を悲み、間もなく其跡を追ひぬ。ウオットンが、此事件を詠じたる左の二行の詩句は、僅々十七語を以て、余豹を盡くせりとて、甚だ有名なり。

彼、先ちて逝きぬ。彼女、しげしがほどは空圍を守りしが、堪へずして跡を追ひぬ。

學者の助
手として
の妻

ワシントンの妻は、良人の訃に接したる時、「よし、萬事皆休せり。われ直ちに彼の跡を追ひ行くべし。最早忍ぶべき艱難あらず」と曰へり。

斯の如く、妻として、朋友として、將た慰藉者として、女子は最も善き者なりしのみならず、亦専門の仕事に、良人の有力なる助手たりし例甚だ多し。ガルヴァニイの場合、即ち其一例なり。ガルヴァニイの妻は、ガレアッチ教授の女なり。彼女は、聴くも電気機械の側に置かれたる蛙の脚が、偶然小刀に觸れて激動せる状を目撃せしが、是れより、良人ガルヴァニイは、今日ガルヴァニズム(流電気)と云ふ一學説を創見したり。ラボワジエーの妻も、實際理學の能力を有したる婦人にして、常に良人の研究を補助せしのみならず、亦彼の著書「元素」の中に挿入せる畫を彫刻したり。

バックラ
ンドの妻

地質學者バックランド博士の妻も其一例なり。彼女は、筆を執りて良人の研究を助け、種々の材料を蒐集し、且つ博士の著書の挿圖及び圖解を作りたり。其子フランク・バックランドが、父の遺著の一に加へたる序文に曰く、「彼女は、良人の仕事に獻身的の奉公を爲したるにも拘はらず、子供の教育を等閑

にせざりき。彼女は毎朝怠ることなく、兒童の音楽及び學問の勉強を監督せり。彼等は今日に至りて、彼女が勞苦の功績を認め、斯の如き賢母の恩恵に最も多くの感謝を捧ぐるものなり」と。

ゼネヴァの博物學者フリーベルの妻は、最も有名なる例なり。フリーベルは、不幸にして十七歳の時眼疾を患ひて、盲目となりしが、最も精密なる觀測と燃犀なる眼力とを必要とせる博物學を研究し、及び通曉するの好手段を得たり。即ち其妻の眼力利用是れなり。眼の不自由の苦みを軽減すべき方便として、彼女は、良人の研究を獎勵せしかば、フリーベルは遂に其不自由を感ぜざるに至れり。由來博物學者は長壽なりと云はるゝ通り、彼の生涯も極めて長く、幸福なるものなりき。彼は盲目ならざりせば、幸福ならざりしなるべしと言ふを常とせり。彼曰く、「予は予の如き不具者が、如何ほどまでに愛せらるゝものなるかを知らんと欲せず。然し眼の見えざるが爲めに、予に取りて、予の妻は常に若く、常に活潑に常に可憐なり」と。フリーベルの著書は、今日に於ても、世界の學者が、嘆賞措かざる名著なり。此書を読む者にして、著者が、二十五年間

全く盲人なりしを思ふ者は、恐らく一人もあらざるべし。

ハミルトン夫人が、其良人たる、エディンバラ大學哲學の教授ウィリアム・ハミルトンの研究に獻身的なりしは、最も人の心を感動せしむるものなり。過度の勉強の爲めに、彼が五十六歳の時、不自由なる中風病者となりてより、彼女は彼の手となり、眼となり、心となり、其他一切のものとなれり。彼女は彼の仕事と同化して、彼の爲めに、讀書し、意見を陳し、講義録を草し、訂正し、其他自ら適當と感ぜし一切の事に與かりて、彼を補佐したり。妻としての彼女の行爲は、實に烈なりと謂ふべし。蓋し、此良妻ありしが爲めに、ハミルトンの學問は、始めて其光を得たるなり。彼は由來燕雜不規則的なりしが、彼女に依りて矯正せられぬ。彼の天性は學問好きなりしも、懶惰なりき。然るに、彼女の活潑にして精力的なる氣質に依りて感化せられたり。彼女は良人に缺けたる性質に富みしかば、彼の天才は、之が爲めに非常の刺戟を受けたり。

ハミルトンが教授の職に就くや、競争者は卑劣にも種々の惡聲を放ち、彼を以て亂心者なりと呼はり、大學教授の資格なしと罵りぬ。是に於て、彼は妻

の力を藉りて、當局者の推薦の正當にして、反對者の誤れる所以を證明すべく決心せり。講義の原稿もなければ、彼は第一學期の講義を日々作りて、翌日之を講座に講ぜり。彼の妻は毎夜彼の傍に侍して、材料を集め、之を清書せり。ハミルトン傳の記者曰く、『時として、講義の下調べ容易ならざることあり。此時彼は朝の九時頃までも、熱心に筆を執り、忠實なる助手は疲れ切つて、尙ほソープアの上に昏々として眠れり』と。

時としては、講義の原稿が時間に足らざることもありたり。兎も角も斯の如き助力を得て、ウイリアム・ハミルトンは其職を全うし、講師としての名譽を揚げ、遂に世界の大學者として歐洲各國に認めらるゝに至りぬ。

其存在によりて、心配を和らげ、其性情の柔和によりて、短氣を鎮むる底の婦人は、慰藉者なり、又眞の助手なり。獨逸の學者ニールは、此意義に於て、彼の共力者として其妻を見たり。實に彼女より平和と慰藉とを與へらるゝこと微かなりせば、彼は斯の如き大學者たることを得ざりしなり。彼語りて曰く、『彼女の性情の柔和と愛情とは、予を榮達せしめ、多少此生涯より、予を分

ニール
の妻

ちたり』と。然れども、彼女は、直接の助力者なりき。ニールは、常に彼女と共に歴史、文學、政治を論じ、彼女は又、彼の學問が世界に貢獻する所あるを、無常の樂みとしたり。

ジョン・スチュアート・ミルの妻も、玄々奧妙なる學理研究に於ける彼の助手として充分價值ある女なりき。其著「自由論」のデヂケーションに曰く、『予の著述の最も良きもの、鼓吹者たり、且つ一部分の著者たる、換言すれば、其眞理と權利とに對する強き感觸は、予の最も大なる刺戟にして、其意を迎ふることは、予の第一の報酬たりし、友人たり將た妻たる彼女を愛し、且つ悼むの記念として、此書を捧ぐ』と。

ハツデイントン寺の墓地に、カーライル夫人の墓石あり。其碑文は、良人たる有名なる文學者カーライルの筆にして、亦此種の一例證とするに足る。其文に曰く、『生前彼女の有したる困苦は、常人に越えたり。されど、彼女は比類なき勝氣、卓見及び貞節を有したり。四十年の久しき、彼女は、良人の眞の助手たり、愛の變はらぬ内助者たり。而して言語と行爲とを以て、何人の力も及ばざ

カーライ
ルの妻

るほど、總ての價値ある事業及び計畫に於て、彼を勵ませり」と。

フアラデーの結婚後の生涯は、頗る幸福なるものなりき。彼は同時に内助者及び慰藉者として、其妻を見たり。彼女は所謂「思ふまゝの氣樂を與へつゝ、一生彼を助け慰め且つ勵ませり。其日記に於て、彼は「他の一切の者に負に勝れる名譽と幸福との根本」として其結婚のことを記せしが、二十八年の經驗後に、其結婚を記して「或る他の者よりも、多く此世の幸福と、心の健全なる状態とを彼に與へたる出來事」と云ひ、又「其結婚は、品性の深さ及び強さの外に、決して何者をも變化せざりし」と云へり。而して夫婦が比翼連理の歡情を樂むこと實に六十五年の久しきに及び、白髮枯瘦の老翁の情愛は、綠髮紅顏の少年時代の如く熱烈なりき。

黄金の鏈鎖、天より垂れぬ、

其鏈環は灼きて一様なり、

垂れて眠の如く、戀人の上に落ち、

優しき心を結び合はすなり。

この詩は、蓋し斯の如き場合の結婚を意味せるものなり。

助力者たる外に、女子は有力なる慰藉者なり。其同情は無能にして休むものにあらず。能く和らげ、能く悦ばしめ、能く樂ましむ。トーマス・フーリの妻の事蹟は、之を證して餘りあるものなり。彼女が、多年の病苦に惱める良人に、獻身的なりしことは、天下稀に聞く最も可憐なる事柄なり。非凡なる見識を有せし婦人なりければ、彼女は、能く良人の天才を明察し、慇懃と同情とを以て、人生の健闘に疲れ果てたる彼の精神に、清新の氣を與へぬ。彼女は、良人の周圍に希望と愉快との空氣を作り、而して、彼女が愛の光は、病弱なる良人の枕頭に於けるが如く、明かに何處にも輝かざりしものゝ如し。

彼も亦明かに、妻の價値を認めたり。其旅行地より妻に寄せたる書に曰く、「予は卿を知らざりし内は、何ものにて、もあらざりき。予は天下第一の幸福なる榮譽ある人なり。希はくは其誠を大切に藏めて、予の錯る時に、予の爲めに、そを思ひ起せよ。予が熱心に、欣然として、此手紙を書くは、仔細なきにあらず。第一に、卿のやさしき手紙を、只今接手せり。第二に、我等の親愛なる子供等の事を、想ひ出せり。嗚呼可愛き者らよ。我等夫婦が愛の鏈なり。さて、其次は、我心

より溢れ出で、卿の心に通ずべき微妙なる感情なり。而して最後のものは、卿の眼が敏くも何を今予が書きつゝあるかを知る所の智慮なり。何事が予に起るとも、予が意中の妻は、予の筆より彼女の柔和、價值、卓越を承認せることを追想す」と。又一寸外出せる間に、走り書きして送りたる手紙は、彼が如何に其妻を愛したるやを示すものなり。曰く、「予は公園に行きて、夫婦して散歩したる所を逍遙し、同一の椅子に腰打ち掛け、而して、より幸に且つ、より善く感じぬ」と。

フーアの妻は、唯り慰藉者たるに止まらずして、彼が文學上の仕事の助力者なりき。彼は自作の詩を読み直して、然る後、彼女の訂正を請ひしほどに、彼女の判断力に信頼したり。而して彼女の強き記憶力は、屢々彼に必要な引證を呈供したり。是に依りて之を觀れば、實にフーア夫人は、天才の人の妻女列傳中、筆頭第一に値ひするものと謂ふも、決して誣言にあらざるなり。

半島戦争史の著者、サア、ウイリアム、ナピールの妻も、助力者として、之に譲らざる女なり。ナピールが此大著述に志せしは、妻の鼓舞に依る。而して、若し

ナピールの妻

彼女の補助なかりしならば、其完成を見ること能はざりしやも亦未だ測る可からず。彼女は材料たる文書を翻譯し撮要したり。是れ實に容易の業にあらず。而かも、此等文書の多數は、暗號を以て記述せられたるものに於てをや。夫の世人が最も解するに苦みたる、ジョセフ王と皇后ヴァイクトリアとの書簡の如きも、彼女の精勵と手腕とに依りて譯せらるゝに至りぬ。流石のウエリントン侯も、此事あるを聞きて、最初は信ぜず、傍人を顧みて、「予の爲めに半島戦争に於ける暗號文を譯する者あらば、二万磅の賞金を與へん」と言ひし程なりき。ウイリアム、ナピールの手蹟は、甚だ不明瞭にして、讀み難きものなりければ、彼女は一々之を淨書して、見事なる原稿となし、之を出版書肆に渡したり。斯の如き多忙の業務に身を委ねながら、彼女は刹那も家庭の教育及び監督を懈ることあらざりき。良人ウイリアムの死期迫るや、不思議に彼女も亦病みて再び起つ能はず。是に於て、彼女は家人に命じて、ソファの上には臥しながら、病軀を良人の枕頭に運ばしめ、斯くて病夫婦は無言の裡に、此世の名残を惜みぬ。ウイリアム、先づ鬼籍に入り、數週日を経ずして、彼女も亦其

跡を追ひ、斯くて夫婦は一基の墓石、苔冷かなる所に永く眠れり。

此種の婦人にして、予の記憶に浮び来るもの尙ほ甚だ多し。予は繁を厭はず、彼等の名を列擧して、餘白を充たさんとす。フラックスマンの妻、アン・デン・アムの如き、其一人なり。美術保護の爲めに良人と共に羅馬に客となり、勞を分かち苦しむるに、良人を慰め且つ勵まし、遂に其素志を貫通せしめぬ。フラックスマンは、結婚後四十年目に、其名作「信仰」「希望」「博愛」の三彫刻をば、彼の切なる愛情の印として、彼女に奉呈せり。又ロセツチーと共に、前ラファエル派の牛耳を執りし、詩人にして畫家なる、ウィリアム・ブレイキの妻、カサリン・ブリーチャーは、其良人を當代第一の天才なりと信じ、其仕事を助け、常に影の身に從ふが如く、遊歴を共にし、四十五年間苦樂を分かち、死に至るまで、良人を慰めたり。ブレイキが七十一歳の作なる最後のスケッチは、彼自身の畫像なり。之を作るに當りて、彼は妻を呼び、待て、ケートよ、暫時辛抱して、其儘に居るべし。予卿の肖像を畫かんとす。何となれば、卿は常に予の天使なりしが故なり」と呼びたり。探檢家フランクリンの妻も、貴き婦人なり。彼女は、北極洋の秘

密を闡明し、良人の行衛を搜索するの事業に盡瘁すること多年、幾多の失敗も、其獻身と決心とを動かすに足らざりき。獨逸の畫家チンメルマンの妻の如き、亦感ずべき婦人なり。彼の極端なる薄命は、何者も之を慰むるに足らず。彼に同情し、彼に聞き、彼を理解するものは、唯り彼の妻ありしのみ。彼女の將に死せんとするや、「我憐れなるチンメルマンよ、今亦誰か汝を理解するものぞ」との語を以て、永く良人と訣れぬ。之を聞きて泣かざる者は、果して誰ぞ。今翻りて、他の方面に、良人を助けたる婦人を求めんか。ワインスベルヒ城の開城に先ち、城内の婦人等相謀り、彼等の貴重なるものを移轉せんことを、攻圍軍に請ふ、許さる。是に於て、彼等は各自其良人を背負ひ、城門を出て行きぬ。ニスデル卿は、妻に諫められて、互に服裝を交換し、卿は女装して、彼女の馬に乗り、無事に牢獄を脱したり。而して、妻は其代りに、獄中の人となりぬ。斯の如き例は、亦デラバレットの妻によりて繰返されたり。

身を以て良人の難を救ひたる烈女の最も有名なるは、グロシアスの妻なり。グロシアス、故ありて、和蘭政府の忌諱に觸れ、無期徒刑を宣告せられて、ゴ

ルカムに近きローヴェスタインの要塞に禁錮せらるゝこと既に二十ヶ月に及び、彼の妻は自ら請うて彼と共に監房に起臥することを許され、大に其無聊を慰めぬ。彼女は亦一週二回市に出て、良人が研學の爲めに書籍を自宅より運び來ることを許さる。後には大なる書笈のまゝに運ぶことさへありたり。最初は番人も嚴密に笈中を検査したるが、異状なければ、終には怪むことなく、自由に其出入を許すに至れり。是に於て、グロシアスの妻は、彼を救ひ出す一策を案出し、一日自宅に持ち返るべき箱の中にグロシアスを忍ばしめぬ。其運搬を命ぜられたる二名の兵卒は、其箱を持ち上げしが、平常よりは、重きこと甚し。兵卒の一人、戯れて曰く、『こは、アーミニウス派の學者先生其人が入り居るにはあらずや』と、グロシアスの妻は氣轉を利して答へて曰く、『恐らく、アーミニウス派學者の書物なるべし』と、書笈は事なく、ゴルカム市に運ばれぬ。虎口を脱したるグロシアス、即ち猶豫もなく、走りて國境を越え、辛うじてブラバントに達し、轉じて佛國に入り、此處に初めて其妻と邂逅せり。

妻
ハイネの

艱苦は夫婦の試験なり。艱苦は眞の品性を作り、夫婦の和合を來たすものなり。又最も高潔なる幸福の根本となり得るものなり。苦なき樂は、苦なき成功の如く、男にも女にも利ならず。ハイネは、其妻を失うて、哀戀の情禁ぜざりき。ハイネ夫婦は、心を一にして、貧苦と戦ひぬ。されば、運命が漸く彼の上に微笑み初めける頃、忽ち其妻を失ひ、繁榮の樂を分つに由なきは、彼の最も遺憾とする所なりき。ハイネ嘆じて曰く、嗚呼、予は予の苦痛の中に、彼女の愛を算へざるべからざるを奈何せん。他の婦人に見るべからざる、彼女の最も深き最も誠ある愛情は、予をして人間中の最も幸福なる者とならしめ、而かも予が爲めに、幾多の危険不安、注意の源泉たりしなり。恐らく、彼女は愉快の極に達したることなし。然れども、如何なる幸福、如何なる喜悅に代ふるも、愛は悲哀と關係なきものなり。妻を失うて、悲嘆憂悶の淵に沈みながら、猶ほ予は名狀しがたき幸福を感じず。涙が、我等夫婦の頬を傳はりし時、わが胸中の名づけ難き、稀に感ぜらるゝ嬉しき流れは、悦び又は悲みによりて、抑へらるゝことあらざりし』と。

獨逸人の愛には、英國人が奇異に感ずる點あり。こはノヴァーリス、スチルリング、ファイヒテ、ポール等の傳を讀む者の等しく首肯する所なり。獨逸に於て、結婚の契約は、結婚其ものゝ如く重要な儀式なり。而して許嫁中に、彼等は感情を自由に發表して恥となさざるも、英國の戀人は、内氣にして、寧ろ之を卑むの風あり。其一例を擧ぐれば、ヘルデルの未來の妻は、彼を説教壇に見初めたり。彼女は語りて曰く、『余は天使の聲を聞けり。而して、余が未だ會て聞かざりし心靈の詞を聞きたり。其日の午後余は彼を訪うて、余の感謝を述べしが、此時より、兩人の心は一つとなりぬ』と。彼等は數年の後に、漸く正式の結婚式を擧げたり。妻カロリン曰く、『我等は、美しくしき夕暮の薔薇の光に依りて結婚したり。我等は、一つの心なり、一つの魂なり』と。ヘルデルの悦びも、其辭に現はれたり。ジャコビーに寄せたる書に曰く、『予は妻を娶りたり。そは、予が一生の木なり、慰藉なり、幸福なり。空想に於てすら、我等は一なり』と。

又ファイヒテの場合を顧みるに、彼の生涯中、求婚と結婚とは、美しくしき異彩を放つものなり。彼が初めて、クロプストックの姪、ヨハンナ・マリ・アラインを

ファイヒテの妻

見し時、教師の資格にて、チューリッヒの二門闕家に同居せる貧乏學者なり。き身分から云へば、彼と彼女とは、恰も提灯と釣鐘の如し。然しながら、ヨハナは、眞摯なる敬嘆を以て彼を待ちたり。ファイヒテの將にチューリッヒを去らんとするや、彼は其誠意をヨハンナに保證せり。ヨハンナは、彼の甚だ貧しきを知るが故に、餞別として若干の金を與へんと申込みたり。ファイヒテ甚しく感情を害し、一時は、彼女の愛を疑ひしが、やがて思ひ直して、手紙を以て、好意は甚だ謝する所なれども、斯かる恩惠を受くべき理由なしとて、其申込を謝絶したり。彼は遂に學問に成功して、哲學界の雄鎮となりしも、依然として赤貧なりしかば、ヨハンナと結婚するの資を作るには、尙ほ數年間、世界と苦闘せざるべからざりしなり。ヨハンナに與へたる艶書の一に曰く、『予は卿に、獻身する者なり。而して卿が予を以て、人生逆旅の友とするに足ると信じ給へることを感謝す。……世界には、勞力の土地以外、幸福の土地なしと予は信ず。其處に於て、一切の喜悅は、一層大なる勞働に向ひて、我等を勵ますのみなり。我等は手を取り交して、其れを横切り、我等の心が平和の永久なる源

となるまで、互に勵み合はざるべからず」と。

ファイヒテの結婚後の生涯は、極めて幸福なりき。妻は真情ある内助者たることを證明したり。自由戦争中、彼女は篤志看護婦として、病傷兵士の看護に赤誠を捧げ、遂に熱病に冒され、幾何もなくして逝けり。ファイヒテも、亦同病に罹り、一時は危篤に陥りしが、漸く生命を取り止めて、數年間餘命を樂み、五十二歳にして歿せり。

斯の如き獨逸人の美的感情的なる戀愛と、無骨にして實用的なるウイリアム・コベットの求婚及び結婚とは、實に趣味ある好對照なり。高潔なることに於ては、互に優劣なけれども、コベットの比較的鄙俗沒趣味なり。コベットの二十一歳の時、十三歳の少女を見初めぬ。そは彼が某歩兵聯隊の軍曹として、ニウ・ブランクスウキックのセント・ジョーン寺に駐屯したる時なり。或る冬の日に、偶々或る家の門前を通行せる折柄、雪中に在りて洗濯物せる此少女を見、心に『われ此少女を我物とせん』と獨語せり。斯くて彼は、少女と相識るの機會を捉へ得て、滿期除隊後、直ちに夫婦とならんと言交はしぬ。

コベットの品性

彼女の父は砲兵軍曹なりしが、父子相携へて將にウールウィッチに歸省せんとす。コベットは、自ら英國に歸りて、再び相見るまでに、彼女をして安樂に渡世せしめんが爲めに、貯金百五十ギニーを引出して、彼女に與へぬ。少女は感謝と共に、其金を受け納め、再會を期して旅立ちぬ。其後五年にしてコベットは除隊となり、倫敦に着くや否や直ちに砲兵軍曹の娘を訪へり。彼語りて曰く、『予は一年五磅の給金にて、或る軍人の家に奉公せる予が少女を見出し、而して彼女は無言の儘に、かの百五十ギニーをば、封も切らざる儘に予が手に渡しぬ』と。コベットは大に感動して、愈々其戀をつのらし、間もなく妻とせしが、豫想の如く、比類なき良妻なりき。彼は何人に向ひても、常に彼女を稱讚し、一切の快樂と、晩年の成功とを、彼女に歸するを誇りとせり。

世人或はコベットを以て、弱點多き俗人なりと言ふと雖も、彼の天性には、確かに詩歌の一大暗流ありたり。彼は感情を排斥したりと雖も、彼の如く高尚なる感情を有したる人は寡し。彼は心から、其妻の品性に敬服し、其貞節を尊敬せり。青年に與ふと題せる書を著はして、彼は眞の婦人らしき婦人を描

コベットの品性

きぬ。こは確かに英國の文士が描寫し得ざりし所なり。コベットは俗に云ふ所の紳士にあらずと雖も、甚だ清廉、克己、勤勉、力行にして、勇氣あり、精力ある人なりき。彼の説には、認見多しと雖も、彼自身の一家言として見ば、深く咎むべきにあらず。彼の如く現實的なりし人は、少なしと雖も、亦彼の如く理想に感化せられたる者は、更に少なし。彼自身の感情の描寫は、古今獨歩なり。實に彼は英國寫實小説家の泰斗なりと謂ふも、誣言にあらずるべし。

第十二章

經驗の訓練

我は汝の如き偉人と成らんと欲す。汝は方と學識とに秀てたるのみならず、亦年と共に、信仰、博愛、汝に及ぶものなきに至れり。

テニソン

不幸ならざることば不幸なり。禍を知らざるは禍なり。成功に達する道は、艱難によりて吾人を導く道なり。人は、物の真相を示さざる運命の齎らすものにより、より、辛苦の老練なる手によりて、能く過失を示さるゝものなり。

タニエル

悲の一片は苦なり。されど、其より、予は幸福の數片を借る。其中に幸福を見る人、少なしと雖も、そは、わが大藏者なり、造幣局なり。

エルスキン

十字架は錨となる。本分通りに汝の十字架を保て。さらば、其十字架は亦一個の錨とならん。

ドン

日は、のろくとも、永くとも、竟には、夕の歌の鐘響くべし。

古歌

實用の才
智は如何
に如學的
か

實用の才智を學ぶには、唯一の經驗學校あるのみ。教訓及び訓戒は、必要なこと勿論なれども、實生涯の訓練微かりせば、唯理論なるに止まるのみ。品性に眞理の感觸を興ふるは、讀書と教訓とにあらずして、普通の男女の通俗なる天性との結合に由るが故に、生存の困難なる事實を經驗せざるべからず。

隱遁の弊

或る事に適當ならんとせば、品性は日常の仕事、誘惑及び困難の世界に確立し、又實生涯の困難辛苦に堪へ得ざる可からず。世を避け俗を離れて、徒らに抹香の煙に燻ぶるは、多く益なし。脱俗の生涯は、畢竟利己的なり。隱遁は、他を侮辱するの意なり。常に怠惰、病、私利を意味するのみにあらず、有らゆる人間は、勞力と職分との公平なる分擔を受けたり。されば、隱遁は自己及び社會に損害を興ふるものなり。實用の才智を修得するは、唯世界、日常の生活に加入し、其事業に結合するの一法あるのみ。是れ即ち、我が職分の範圍を發見し、仕事の訓練を受け、品性を形づくるべき忍耐、勉勵を以て自ら教育する所以なり。其行路に於ける艱難、辛苦、誘惑は、畢竟吾人が後半生に一異彩を放た

しむるものなり。苦楚の訓練より學ぶ所のものは、學問及び脱俗よりも遙に大なり。

他人に接することは、自己を知るの要件なり。世間の事に通ずるは、吾人の力量資格を作る唯一の策なり。世間に通ぜざれば、人は自慢、高慢、自惚となり、何事に處しても唯茫然自失するあるのみ。

スウキント嘗て曰く、『自己の力量を理解する人には失敗なく、自己の力量を誤解する人は失錯す。そは争ひ難き眞理なり』と。然れども、他人の力量は計り易くして、自己の力量は計り難きものなり。ゼネツアのドクトル、トロンチンといふ者、ルソウを評して曰く、『予の前に彼を伴ひ來れ。僕彼の力量を試めし呉れん』と。焉んぞ知らんや、能く自己を理解せるルソウは、トロンチンが彼を計るよりも、より善くトロンチンを計り得るものなることを。

故に、己を知る事は處世上に甚だ必要なり。又明白なる自信を形づくる第一の要素なり。ヘルテス嘗て、一青年を戒めて曰く、『足下は唯足下の爲し得る所を知れるのみ。足下の爲し得ざる所を知るまでは、足下何事にも成功せず。

又内心の平和を知らず」と。

經驗に依りて利益を得んと欲する人は、助力を求むるものなり。自惚れる人は、何事にも成功せず。吾人は、宜しく襟度を大にして、己よりも賢く、經驗ある人に、學ぶことを恥づる勿れ。

經驗に依りて賢くなれる人は、力めて、眼に觸るゝ所のものを正しく判断し、日常生活の問題を作るものなり。常識は畢竟經驗の結果のみ。常識を得るに、非凡の才智は、忍耐、綿密、細心ほどに必要ならず。ハズリット思へらく、最も賢き人とは、經驗を論據とする、事務及び世俗の才ある人にして、小理窟を捏ねる人にあらずと。

此理に依りて、女子は屢々男子よりも卓識なり。蓋し理窟に偏せずして、事物を自然的に判断し、且つ控目勝ちなるが故なり。女子の本性は、男子よりも鋭敏に、觀察は綿密に、同情は深く、動作は特種の目的に適當なり。故に女子の機智は、能く他人を監理する上に表はる。平凡なる婦人にては、猶ほ能く頑固なる男子の行爲を抑制し矯正することあり。ポープは、ウヰリアム三世の

人生は
學校
なり

皇后メリーに尙ぶ所は、智にあらずして深慮なりとて、其機智と見識とを稱せり。

人生は、經驗の一大學校と見做すことを得べし。其學生には男子もあれば女子もあり、學校に於けるが如く、其學べる日課は必ず信用せざる可からず。吾人は其日課を了解せずして、修學の困難を感ずることあり。特に、教師が、艱難誘惑、辛苦、悲痛を教ふる時を然りとす。且つ吾人は其教師の授くる日課を受くるのみにては足らず、神より命ぜらるゝものと心得ざるべからず。

人生の學校にて、學生の受けたる利益の程度は如何。彼等は如何に、學ぶべき機會を利用するか。何程の精神訓練を得たりや。智識と勇氣と克己とは如何程に發達せしや。彼等は榮華の前に正義を持して、清廉なる行路を辿りしや。若くは私利私慾を逞くせしか。彼は艱難迫害より何を學び得しや。彼等は、忍耐、從順を學び、安心立命の覺悟を得たりや。

經驗の結果は、勿論唯生活にて完うせらるべきものなり。生活は時の問題なり。經驗ある人は、補助者として、時に依頼すべき所以を知る。時と我とは、如

何なる二つの者にも當る』とは、カーディナル、マザリンの格言なり。時は、美にする者なり、慰藉者なりと謂はれ、或は又教師なりと謂はれたり。時は、經驗の食物にして、智識の肥料なり。時は、青年の味方となり、又敵となるものなり。時は、用ひると用ひざるとに由りて、老年の爲めに、或は慰藉者となり、或は苦痛となる。而して過去の生涯には、善惡の區別あり。

ジョー・ハーバート曰く、『時は、青年を撓め直す騎手なり』と。青年の眼に映ずる新世界は、甚だ輝きて新奇、歡喜及び愉快に充てり。然れども、歲月の経過するに従ひて、吾人は、世界が悲哀と歡喜との場所なることを知る。吾人の生涯中に、勞力、苦痛、困難、乃至不運、失敗の如き遠景は、鬚髯として眼前に現はれ來る。然れども、泰然として、困苦と戰ひ、堅忍不拔、高潔なる精神を失はざるものは、幸福なり。

青年の熱望

青年の熱望は、人生に於ける一大助力者にして、活動力と同じく必要なり。熱望は、如何に輝くとも、經驗の訓練中に、漸次冷却す。然れども、熱望は、確かに品性の有望健全なる一傾向なり。熱望は、勇敢無私なる性質の印にして、自惚

理想と現實

は、狹量利己的の印なり。自惚と自慢とを以て、世を渡るは、品性を高くする所以にあらず。斯の如き場合に在りては、人生は、恰も春なき年の如し。溫暖なる種蒔き時節なければ、夏は、花開かず、秋は、實らざらん。抑も、青年は、人生の春なり。此時期に於て、熱望なかりせば、何等の計畫も、何等の成功も見られざるべし。熱望は、信任と希望とを鼓舞し、事務と職分との無趣味に堪へしむるが故に、能く働く性質を助くるものと謂ふ可し。

サア、ヘンリー・ローレンス曰く、『人をして最も善く生涯を送らしむることは、理想と現實とを適合することなり。理想即ち熱望は、高尚なる働きを爲さしむる爲めに、自然に人の精神に興へられたる力なりと謂ふ可し』と。されば、彼は常に、青年に向ひて、熱望を抑制するの不可を説きたり。其説に曰く、『理想と現實との二力が、適宜に調和するときは、現實は、有益なる目的に向ひて、無味なる大道を追及し、理想は、其美を放ちて、道を迷はしめんとす。其間に一道の微光は、次第に灼きて、白晝となるなり』と。

ジョセフ・ランカスターは、十四歳の時、初めて、奴隸賣買とクラークソンと

熱心と忍

云ふ書を読み、國を去りて西印度に入り、黒人にバイブルの教義を説かんと
の志を起せり。彼は直ちに「バイブルと天路歷程」とを手にし、僅ばかりの旅費
を携へて發足せり。やがて西印度に到着せしはせしもの、如何にして其理
想を實行せんか、策なきに苦みたり。此時、父母は、クラークソンの西印度に在
ることを探知し、直ちに人を派して、無理に伴れ歸りぬ。然れども、彼の熱心は
奪ふことを得ざりき。爾來彼は貧民教育の慈善事業に一身を委ねたり。
熱心は、人をして、人生の大計畫に、成功せしむるものなり。これ微かりせば、
人は困難障礙に遇ひて、意氣地なく屈服すべし。然れども、熱心に加ふるに、勇
氣と忍耐とを以てせば、危険に辟易せず、天下の事、一として成らざるなし。新
世界ありと信じて、茫々たる波上に漂ひ、幾度か生死の際に浮沈し、衆皆絶望
して、反を謀るに至り、海中に投せんと脅迫されながら、獨り泰然として自信
を枉げず、遂に大西洋の水平線上に、米大陸を發見したるコロンブスの熱心
は、豈に壯ならずや。
勇敢なる人は、一敗に挫折せず、幾度にて、も成功するまでは試みるものな

(462)

り。木は一撃にては倒れず、力を罩めて幾度も繰り返し、撃ちて後、初めて倒る
なり。吾人は他人の成功を見て、羨めども、其成功の因たる努力、苦痛及び危
険に想ひ到らざるなり。元帥レフェブルの二友人、元帥に向ひて、其名譽と幸
運とを祝しける時、元帥答へて曰く、「足下予を羨むか。よし、足下は予よりも都
合よき約束にて、此等を有し得るなり。いざ庭に出て給へ。三十歩の距離にて、
予は二十回足下を狙うて發砲すべし。予若し足下を殺し得ざるときは、一切
を足下に譲り申すべし。なに、足下厭と云ふか。好し。然らば足下請ふ一考せよ。
予が今日の境遇に至るまでには、更に近き距離にて、一千回以上も狙撃せら
れたる事を」と。

困難の年
季奉公

困難の年、季奉公は、偉人たる者の、必ず經たる所のものなり。こは常に、品性
の最も良き興奮劑にして、最も良き修養なり。活動力を大ならしむるものな
り。彗星は往々日蝕の時に現はるゝが如く、英雄は不時の變によりて光を顯
はすものなり。時に天才は燧石に打たるゝ鐵の如く、神聖なる火光を放つ爲
めに、突然の大打撃を要するものゝ如し。天性は、患苦の中に花咲き實熟する

(463)

ものなれども、安逸の空氣中には、凋落するものなり。遊んで暮らすよりも、苦んで暮らす方が人には、藥なり。戦闘は勝利の要件なり。困難なければ、盡力の必要なし。誘惑あらざれば、克己の修練を要せず。苦痛なければ、忍耐の教育なし。困苦は惡魔にあらずして、勢力訓練、徳義の根本なり。

同じ理由によりて、貧乏と戦ふことも、人に甚だ利益なり。カーライル曰く、『貧乏と烈しき勞力と戦へるだけにも、兎も角も戰場に出でずして、家に籠り、或は輜重隊の中に隠れ、或は貨物によりて、安氣に眠れる人よりも、強く且つ老練なりと謂ふ可し』と。

智識の缺乏は貧乏と比較せらるゝものなりとは、能く學者の口にする所なり。富は貧乏よりも、心を苦しむるものなり。リヒテル曰く、『來れよ、生涯に餘り遅く來らざるやうに、と予は貧乏に告げずには居られざるなり』と。貧乏は、ホレウスを詩歌に追込み、詩歌は彼に、バールラス、ヴァーヰル及びメセナスを紹介せりとは、ホレウス自身の言ふ所なり。ミセレー曰く、『障碍は大なる興奮

貧乏は興奮なり

セルバンテスの事

劑なり。予は數年間ヴァーヰルに私淑して得る所甚だ多かりき。波止場の一露店にて購はれたる、ラシーヌの古本は、ツローンの詩人を作りたり』と。

西班牙人は、卑劣にも、セルバンテスの貧窮を喜びたりと云ふ。且つ彼等は貧乏の爲めに、セルバンテスが、著作を刊行し得ざる可しと竊に想像せり。トレドーの僧正、一日マドリッドに駐劄佛國公使を訪問しける時、坐に數人の佛國紳士ありて、ドンキホーテの著者を稱讚し、其人に一度面會することを得ば、無上の光榮なりと云ふ。僧正は、セルバンテスは國家の爲めに一たび武器を手にしたるも、今は老いて貧に苦めりと答へ、極めて冷々淡々、關せざるものゝ如し。佛人等驚いて曰く、『なに、セルバンテス先生は逆境に沈めりとや。そは甚だ氣の毒なり。何とて國庫より補助せざるや。訝かしき事なり』と。僧正答へて曰く、『天よ、希はくは彼の窮乏を補助することを禁じ給へ。貧なるが故に、彼は齷齪として著述せり。されば世界を富ますものは、彼の貧乏なり』と。健全なる天性の忍耐力を刺戟し、精力を起し、品性を發達せしむるは、安寧にあらずして、困苦なり。富にあらずして、貧乏なり。バーク思へらく、『予は立法

家に抱込まれ、丸め込まれざりき。敵に向つて益々勵むとは、汝の如き人に云ふべき格言なり」と。

失敗の教訓

成功を経て成功すと思ふは誤りなり。人は失敗を経て能く成功するものなり。人の最も善き経験は、失敗より成るものなり。識者は、斯の如き失敗によりて、未來に備ふる手段として、益々自制、機智、克己を練磨す。試みに外交家に問へ。彼は必ず成功よりも、失敗によりて、其外交術を學びたりと答ふるならん。教訓、研究、忠告及び模範の教ふる所は、失敗の教ふるが如く適切ならず。失敗は經驗的に訓練し、爲すべき事、爲すべからざることを教へたり。そは即ち外交術に甚だ屢々必要なり。

偉人の失敗

成功の域に達するまでには、幾回も失敗を重ねるものと覺悟せざる可からず。若し膽力あらば、失敗は却つて勇氣を起さしめ、新たなる盡力を鼓舞するものなり。梨園界の名優と稱せられたるタルマは、初めて舞臺に出でたる時、見物人に叱咤せられ、近世最も有名なる説教僧ラコルデールも、失敗を繰返したる結果、名聲を博したるなり。サン・ロツク寺院に於ける彼の初舞臺に

就きて、モンタレンベルトの記あり。曰く、『彼は全く失敗したり。彼が進み出たる時、衆人は異口同音に、彼或は天才ならん、然れども、到底説教家となること能はずと評し合ひたり』と。されど、彼は成功するまで幾回も試みたり。而して、初舞臺後二年にして、彼がノートルダム寺に説教したる時には、ボスウエー及びマツシヨンの時以來、佛國の大雄辯家が未だ嘗て見ざりし聽衆を有したりと云ふ。

コブデンは、マンチエスターの公會にて、初めて演説を試みたる時、半途にして逃げ込み、議長は彼の失敗に就きて辯護するの滑稽を演じたり。サア、ゼームス、グラアム、及びデスレーリーも、演説の初舞臺に失敗して、聽衆より冷笑と罵詈雑言とを浴せられしが、非常に熱心なる勞力と勉強とに依りて、遂に成功したり。或る時グラアムは、公開演説を中止するまでに失敗し、悄然其友人サア、フランシス、バーリングに向ひ、『予は有らゆる方法を講じたりしが、駄目なり。残念ながら予は成功することなからん』と言ひしが、不撓の忍耐に依りて、デスレーリーの如く、議會第一の雄辯家となれり。

一〇方面に於ける失敗は、偶々達眼の學生をして、他方面に自己を適用せしむるの功あり。プリドゥウが、ウグボロの寺役人とならんとして招きたる失敗は、彼をして學問に身を委ねしめ、遂にウースターの僧正とならしめたり。法律家として教育せられたるボワローは、訴訟辯護の初舞臺に失敗し、笑聲場裡に辯論を中止したり。彼は次に説教師とならんとして、再び失敗したりしが、遂に詩人として大成功をなしたり。フォンテネル及びヴォルテールも、辯護士とならんとして失敗せり。カウパーは、英國に於ける詩學を再興したる詩人なるが、疑惑と臆病との爲め、初めて訴訟事件を辯護せし時失敗したるなり。モンテスキウ及びベンサムは、法律家として失敗し、其れより適當なる職業を求めて、法律に斷念したり。ゴールドスマスは、外科醫として失敗したるが、荒村及びグイーカー、オブ、ウエイクフィールドの著者として成功したり。アヂソンは、演説家として失敗し、サア、ロージヤード、カバリー及びスペクター、ターに不朽の名文を残せり。

天才の辛酸

勇氣ある人は、視聽の如き必要なる人體の感覺を缺くも、尙ほ能く人生と

健闘するものなり。かのミルトンを見よ。晩年明を失して、不自由なる盲目となりしも、能く其苦を忍びて、其道を進みしにあらずや。失樂園の如き彼が名詩は、多く、貧困、病氣、老年、盲目と云ふ天と人との迫害に最も苦める時期に成りたるなり。

ダンテとカモエン

偉人の傳記は多くは、艱難及び失敗に對する不斷的戰爭記なり。ダンテは貧苦流竄中に其神曲を作りたり。地方的反亂の爲めに、彼が其故郷を脱するや、彼の家は掠奪せられ、缺席裁判にて死刑を宣告せられぬ。一友人彼に書を寄せて、若しフロレンスに歸るを願はば、赦免を請うて、專制主義に降る可しと。ダンテ答へて曰く、「否、そは、余を歸國せしむる道にあらず。若し足下又は、或る他の人が、ダンテの名譽を毀損せざる道を開かば、余は急いで國に歸るべし。然れども、斯かる道によりて、フロレンスに入る能はざれば、余は決してフロレンスに歸らず」と。彼の敵は、ダンテを媾和し難き者となしたり。ダンテは追放二十年、遂に異郷の土と化したり。迫害は尙ほ其死後に及び、其遺著國家論の刊行せらるゝや、羅馬法王は命を發して、之をボロンヤの市に燒棄せし

めたり。

カモエンスも亦追放中に多く其名詩を作りたり。サンタレムの閑居に倦むや、ムーア人に對して遠征を試み、其大膽一世の耳目を驚倒したり。或る海戰中敵船に躍り込みたる時、傷つきて其一眼を失ひぬ。東印度のゴアに於て、葡萄牙人が土人を虐待せる由を知るや、悲憤慷慨して知事と激論したりしが爲め、殖民地を追はれて支那に送られぬ。然るに途にして船難破し、唯ルシアドの原稿を携へて、纔に身を免れぬ。迫害と困苦とは、到る處に彼を追及せるが如く、マカオに於て捕はれて獄中に投ぜられしが、遁れて海上リスボンに志し、十六年目に辛うじて到着することを得たり。されど身に一錢の貯もなく、何れを見ても他人ばかりなり。其ルシアドは間もなく出版せられたり。之が爲めに彼の名聲は高まりしも、錢は得られざりき。彼の召使へる印度人アントニオが、甲斐々々しくも市に出でて、彼の爲めに食を乞ふこと微かりせば、彼は必ず餓死せしならん。斯くて、彼は貧困と病氣とに窶れて、遂に救貧院に死せり。惟しげる石碑には「ルイス・デ・カモエンス此處に横はれり。彼

は其時代の詩人中に一頭地を抜き、貧窮と不幸との生涯を經、貧窮と不幸とに終りたり」と記されぬ。面目無きも、眞實なる此碑は、後年取除けられて、葡萄牙の大國民的詩人の名譽を表すべき、虚偽の華美なる碑銘其代りに置かれたり。

ミケールアンゼロと雖も、其生涯の大半は、猜疑者の迫害する所なりき。俗氣紛々たる貴族僧侶、銅臭の俗人輩は、彼に同情なく、又其天才を認め得ざりしなり。法王ポール四世が、彼の製作最後の裁判を罰したる時、アンゼロ笑ひて曰く、「我が製作に斯の如き過酷なる妄評を下さんよりも、法王は自ら社會の惡風矯正に力むるこそ、よけれ」と。

タッソも亦間斷なき迫害と不幸との犠牲たりき。瘋癲病院に在ること七年、後伊太利全土に流轉せり。死に臨み書して曰く、「余は運命の迫害を怨みず。何となれば、乞食の墓に、予を導き終らせたる人々に、怨言を發するを欲せざればなり」と。

時の復讐

然れども、時は奇なる復讐を行ふものなり。被害者と加害者とは、其位置を

換ふること往々これあり。偉大なる者は前者なり、小なる者は後者なり。迫害者の姓名は、其苦めたる人の傳記に残る外は、恐らく世に忘却せらるべし。見よ、タツソ―禁錮事件の外に、フェララのアルフォンソ侯の名を知る者ありや。シルレルの迫害以外、百年以前のウルテンブルグ大公の存在に就きて聞きたる者ありや。

偉人の苦痛

科學界も亦困難、迫害、苦痛と健闘したる殉難者を有せり。ブルノー、ガリレオ、以下の大學者が、其學説を誤解せられて窘迫せられたる次第は、前章之を述べたれば、茲に反復するの要なし。然れども、此他に、尙ほ學問界の薄運見あり。彼等の天才は、偶々以て群小の怨恨を招くの因となれり。佛國の有名なる天文學者にして、巴里市長たりしベイヤ―及び大化學者ラボワジエ―は、佛國革命の時、運拙くして、斷頭臺上の露と消えたり。ラボワジエ―死刑の宣告を受くるや、研究中なりし化學の實驗を完結する爲めに、數日間の放釋を嘆願せしに、無道なる判官は、共和政治に學者の必要なしとて、其願意を斥け、即刻刑の執行を命じたり。彼と殆ど時を同じうして、英國に於ても近世化學の

開祖ドクトル、ブリーストレ―は、學者は無用との叫聲の中に、其家を焼かれ、研究室を毀たれ、纔に身を以て國外に逃れぬ。

大発見家の事業は、迫害、困難、苦痛の間に仕遂げられたるものなり。新世界を発見して、舊世界に財産を興へたるコロンブスは、生存中、其恩を仇なる社會の苦むる所となれり。マンゴバークの幽魂は、其発見せる亞弗利加河の水底に残りて、今も尙ほ嘸々として鬼哭す。同大陸の中央なる一大湖水の邊に、熱病の爲め無限の恨みを留めたるクラベルトンの死は、後年他の探検家の発見する所となりて、其雄名を後世に貽せり。探検家フランクリンが北海の氷雪中に死したることは、起業と天才との歴史に於ける最も悲惨なる出來事なり。

航海家フ
リンデル
ス

フランス島に、六年間幽閉の苦を嘗めたる航海者フリンデルスの場合、稀有の辛酸と謂はざるべからず。一千八百一年、彼は探検の目的を抱き、インヴェスチゲーター號に乗りて英國の地を離れたり。時に英佛二國は開戦中なりしも、神聖なる學術保護の名によりて、佛國政府に請ひ、旅行免狀を下附

せられたり。航海中、彼はアウストラリアの大部分、ヴァンダイーメンス島及び其附近の島嶼を調査したり。インヴェスチゲーター號は、老朽し漏船となりて用を爲さざるに至り、三年間に於ける苦心の結果を海軍省に報告せん爲め、ポルバス號に便乗し、歸國の途に就きしが、不幸にして、其船、サウス、シーにて坐礁せり。フリンデルス即ち數人と共に、一葉の短艇に乗り、七百五十哩以上の渺茫たる大海の波浪を漕ぎ抜けて、辛くもジャクソン港に到着し、苦心の末に、一小帆カンパラインド號を購入し、遭難地に引還して、残りの人々を救ひ上げ、英國指し、出發せしが、カンパラインド號も、難破しかゝりしかば、針路を轉じて、フランス島に難を避けたり。此處に彼は意外にも、船員一同と共に捕へられて、理も非もなく獄中に投ぜられ、佛國政府の旅行免狀は何の効をも示さざりき。フリンデルスが最も憂慮したるは、アウストラリア沿岸の測量中、偶然邂逅したる佛國の探検家ボウチンが、愚圖々々せる中に、先づ歐洲に歸りて、拔駟けの功名に誇りはせぬやとの懸念なりき。果せる哉、其幽閉中に早くも、新發見の佛國地圖は出版せられ、フリンデルスの一行が名

を與へたる海角等は、別名を以て記載せられたり。フリンデルスは、後釋されて、英國に歸りしが、禁獄六年健康甚だ衰へぬ。然れども、彼は汲々として、世界地圖を訂正し、死に至るまで息まず。遂に其事業の完結せし其日を以て鬼籍に上りぬ。

勇氣ある人は、其餘儀なくされたる閑居中に、往々非常なる事業を成すものなり。圓滿なる精神は、能く閑居中に養はる。精神は寂寞の爲めに自然に其精力を奮起するが故なり。閑居によりて、利せらるゝと否とは、主として、節制と訓練と品性とに依るなり。大なる天性の人は、閑居によりて、益々其心を純潔ならしめ、小人は陋劣なる心を益々陋劣ならしむ。古語に曰く、小人閑居して不善を爲すと。閑居は偉人を養ふものなれども、小人を苦しむるものなればなり。

ベエチウスの「哲學の慰め」及び聖書研究の傑作と云はれたる「グロチアスの「聖マッシュェウの記」は、獄中の所作なり。ブツカナンは禁錮中に「バラフレ」ゼス、オン、ゼサルムス」を著はし、伊太利の愛國僧カムパネルラは、叛逆の冤罪

を蒙り、ネアポリタンの獄に呻吟すること二十有七年、仰いで天日を見るを得ざりしも、一層高き光を求めて、「シピタス、ソリス」を著はしぬ。此書は歐洲各國語に翻譯せられ、紙價爲めに高し。ラレイは、十三年間の入牢中に、世界史を起稿し、初めの五冊だけを書き下したり。ルーテルは、ウァルトバルグ在獄中、聖書を翻譯し、其有名なる文句及び文章は、全獨逸に擴がりぬ。

吾人が今日「天路歷程」の恩恵に浴するは、パンヤン入獄の餘澤なり。獄中の無事に苦みて、彼の活潑なる精神は、思索及び默想に、其餘憤を漏らせるなり。されば、出獄後、文學者として彼の生涯は終りたり。彼の「グレイス、アバウンデング」及び「神聖なる戦争」も獄中の作なり。彼は十二年間ベッドフォードの獄に在りたり。マカウレーが、世界最大の寓言と稱譽したる「天路歷程」は、實に禁錮の庇蔭なり。

パンヤン時代の政黨は、政權を掌握せる時に、反對黨を捕へて、無道にも獄に投じたるものなり。パンヤンが牢屋の經驗は、主として、チャーレス二世の時代に屬せり。先帝チャーレス一世及び次期の共和政府時代中には、名士の

入獄せる者甚だ多かりき。前者の時代には、サア、ジョン・エリオット、ハムデン、セルデン、プリン等あり。エリオットには、倫敦塔に入獄中、ゼ、モナルキー、オブ、マンの著あり。詩人ジョージ・ウイザーも、亦チャーレス一世時代入獄者の一人にして、其有名なる「國王への諷刺詩」は、マーシャルシー在獄中の所作なり。王政復古に至りて、再びニウゲートに投ぜられ、後、倫敦塔に移されしが、再び天日を見ることなくして、此處に牢死したりとの説あり。

クロムウエルの共和政府も、若干の入牢者を有せり。サア、ウキリアム・ダウエナントは、勤王の爲めに、カウエスの獄に投ぜられ、其詩「ゴンドベルト」を作れり。彼の放免は、ミルトンの宏量に依る所甚だ多し。されば、彼は其恩を忘れず、チャーレスの復位するに及びて、ミルトンの生命を救ひたり。詩人と武士とを兼ねたるラウレリスも、亦ラウンドヘッドの獄に呻吟すること年ありしが、巨万の財を投じて、初めて放免せられたり。彼はスチュアート家の爲めに、孤忠を守り、一切の資産を失ひしも、王政復古に至りて、其義に報ゆる者なく、極貧を以て死せり。

ウキザー及びバンヤンの外に、チャールズ二世は、バックスター、ハリントン(オセアナの著者)ベン、其他の名家を獄に投ぜり。總て此等の入牢者は、筆を以て獄中の鬱を慰めたり。バックストーンは、キングスベントの獄中にて有名なる「ライフ、アンド、タイムス」を書き、ペンは倫敦塔中にて、「ノー、クロッス、ノー、クラウン」を著はしたり。女王アンの時マッシュ、プリオルは、二年間の在獄中に、「アルマ」一名「靈魂の進歩」を著はしたり。

此時より以後、英國に於て、政治的入牢者の數は次第に減じぬ。最も有名なる入牢者中に、亦デフォードあり。彼は其生涯の大部分を獄中に送りぬ。ロビンソン漂流譚及び政治的論文は、獄中の所作に係る。其詩、首架の讚も亦然り。スモレットは、誹毀罪の爲めに禁錮せられ、其間に「サア、ランセロット、グリーヴス」と云ふ小説をものせり。近世入獄文士の最も有名なるものは、ヨークの獄中にて、其詩集第一巻を書きたるモントゴメリーと、スタッフォードの獄中にて、自殺の淨土を著はしたるトーマスクーパーなり。

シルヴィオ・ペリコは、獄に投ぜられたる伊太利最近の有名なる文士なり。

入牢約十年、其八年をモラヴィアのスピールベルグの獄中に送れり。其間彼は燃犀なる觀察力を働かせて、妙なる「メモワール」を著はしぬ。彼は牢番の少女の短かき訪問と單純無味なる獄中生活とに依りて、思想の小天地に樂しく逍遙せり。

匈牙利文學の大革新家、カジンスキも、七年の星霜を順次、ブダ、ブルンネ、クフスタイン、ムンカクスの獄中に送り、獄中日記を物せり。彼はブダの獄中にて英語を研究して、沙翁を讀むほどに上達し、後ステルンの「人情旅行」を譯せり。

以上の如く、法律の罰を受け、一時失望せりと思はれたる人は、其實失望せざるなり。全く失望すべき筈の人は、却つて、鰻上りに成功せる人よりも、有力なる不斷の感化を人類社會に行ひたり。人の品性は、其盡力の成功と失敗とに依るものにあらず。身を殺して仁を爲す人は、失敗にあらず。何となれば、彼が苦痛の因たる眞理は、其犠牲の爲めに、新光明を發揮するが故なり。我が意思の爲めに命を顧みざる愛國者は、之によりて、勝利を得ること急なり。一大

失敗は常に
損失に
あらず

事件の急先鋒となりて、生命を棄てたる人は、後継者の爲めに、能く長安に達するの大道を開き、勝利の手に我が死骸を渡すものなり。正義の勝利は來ること遅しと雖も、一たび來るときは、最後の成功者に歸すると共に、又最初の失敗者に歸するものなり。

偉大なる死は、人をして感動せしめ、天下の龜鑑となるものなり。偉大なる行爲は、其人の生命と共に死するものにあらずして、後世の模倣者の行爲となりて、何時までも生存するものなり。されば、偉人の或る者は、死して初めて生ありと謂ふべきなり。

宗教學問信念の爲めに、身を殺したる人は、人類の大なる尊敬を受くるに價ひせり。彼等は死せり。然し、彼等の眞理は生存せるなり。彼は一時失敗せるもの、如くなれども、最後の成功を見たり。牢獄は、彼等を幽閉し得れども、彼等の思想は、其壁によりて、妨げられざるなり。彼等は、突然鐵壁を突貫して、其迫害者の力を支へたり。ラッレーヌ歌うて曰く、

石の壁、牢獄を造るに何かせん、

黒鐵の柵、檻を造るに足らず。

潔白沈着なる人は思へ

牢獄は別荘なりと。

能く苦み得るものは、能く行ひ得るものなり。とは、ミルトンの格言なり。職分の爲めに盡くしたる偉人の事業は、苦痛艱難の間に仕遂げられたるものなり。彼等は、風波と戦ひ、辛うじて陸に泳ぎ着きたる頃は、既に氣力衰へ、唯砂を攫みて絶命するが如し。然し、斯の如き人の上に、死は、毫も其力を加ふる能はず。神聖なる彼等の記念は、生き残りて、吾人を慰め、純化し、満足せしむ。テ曰く、「人生は苦痛なり。吾人の罪の輕重を定むるものは、唯神あるのみ。死したる人を非難する莫れ。後世の考ふ可きは、唯彼等の爲したる事にして、彼等の失敗と苦痛とは、あらざるなり」と。

不幸は試金石なり

不幸は品性の試金石なり。草は芳ばしき香氣を發せん爲めに潰さるゝ必要ある如く、天性は、其偉力を喚起するために、困難によりて試みるべき必要あり。故に困難は、屢々徳義を表現し、其隠れたる美を發揮せしむ。一見平凡なる人が、一たび困難の地に置かるゝや、忽然として意外なる品性の力を現は

し、前に柔弱我儘と見えたるものは、勢力、勇氣、克己となるなり。
 幸福變じて罪惡となるが如く、困難變じて幸福となるものなり。こは總て彼等を利用すると利用せざるとに歸すべし。凡そ圓滿なる幸福は、此世に於て到底求むべからず。若し有らば、そは甚だ不利益なり。安逸を教ふる福音書は、最も不信なるものなり。困難及び失敗は良教師なり。サア、ハンフリー・デーヴィ曰く、『一個人の生涯に於ても、十分過ぎたる榮華は、徳義ある人を害して、其終りを善くせしめざるか、又は他人の嫉妬、讒謗、惡意を起さしむるか、二者の一なり』と。

失敗は性情を改善し、天性を堅固にするものなり。悲哀と雖も、或る神秘的
 方法によりて、歡喜と聯結し、愛情と合同するものなり。バンヤン曰く『若し正しければ、手は大なる愉快の代りに、大なる苦痛を神に祈らん』と。非常なる苦痛を忍べる一アラビア女に、感嘆の語を發せし時、其女答へて曰く『神の御顔を拜せば苦痛を忘る』と。

疑ひもなく、苦は快として、神の命ずる所なり。蓋し品性の訓練上前者は後

者よりも夙かに力あればなり。苦は天性を懲戒し、忍耐と沈着とを教へ、最も深遠なる思想を振作するものなり。

救世主なる聖は苦痛者なりけり、
 溫柔、恭敬、忍耐、沈着なる靈の人なりけり、
 君子中の君子なりけり。

艱難は汝を玉にするの方便なり。幸福を人生目的の極致とせば、苦痛は其目的を達するに必要なる條件なり。罰すれども殺すにあらず。悲哀なれども、常に愉快なり。貧なれども、多くの富を作り、無一物なれども、一切の者を有す』とは、聖ポールの基督教的生涯を説きたる反證なり。

苦痛は全く苦痛に非ず。苦痛は一面艱難と結び、一面幸福と結ぶ。艱難は一面より見ば不運にして、他方より見ば訓練なり。然れども、艱難に向つては、多數の人の良性は、眠りて覺めざるものなり。實に苦痛と悲哀とは人間成功の必要條件にして、天才を發達せしむる必要方便なりと謂ふを得べし。セレー嘗て詩人を詠じて曰く、

最も不幸なる人、誤つて詩人となる。

彼等が歌うて教ふるものは、艱難に當りて學び得たるものなり。

パインス若し富貴にして馬車あらば、彼に詩歌ありと誰か想像し得んや。パイロン若し良配を得て、玉璽官又は郵便局長とならば、誰か今日詩人パイロンを見んや。

時として、悲嘆は物に動せぬ性を起すものなり。聖哲曰く『苦まざりし人は、何を知るか』と。デューマが『君を詩人たらしめたるものは何ぞ』とレポールに問ひし時、答へて曰く、『苦痛なり』と。彼は相續ぎて最愛の妻子を失ひ、悲嘆の極閑居して、詩歌を作り、以て其心を慰めたり。女流作家ガスケルの美妙なる詞藻は、家庭的悲哀の結果なり。

困苦中の
仕事

男子及び女子の爲したる有益なる仕事は、多く困苦の中に於て仕遂げられたるものなり。即ち或は困苦を免れんが爲めに、或は個人的苦痛を犠牲にする職分の一念より仕遂げられたるものなり。ドクトル、ダーウキン其友に語りて曰く、『予にして、若し病身にあらざりせば、斯の如く大事業に成功せざりしならん』と。ドクトル、ドンも、自己の病身に就きて次の如く曰へり、『足下』

ひ他の予の友人が、予の屢々熱病に冒されたることより受くる利益は、予が天の門前に屢々到りて、多く得たる所のものなり。予は引籠り勝ちなるが故に、病に冒さるゝこと度々にて、之が爲めに祈禱することも度々なり。而して祈禱には、足下及び予の親友は決して忘却せられざるなり。

シルレルは、病苦中に多くの傑作を作れり。ハンデルは不治の病に冒されたる時より、益々偉大なる音楽家となりぬ。彼は病苦と戦ひつゝ、其名を不朽に傳ふべき大作を作りたり。モザルトも、債鬼と病魔とに苦める最中に、有名なる幾篇の樂劇と最後の傑作レクイエムとを作れり。ベトリーヴェンが音楽上の大作は、耳聾して苦悶の境遇中に成りたり。大音楽家シューベルトは貧にして短命なりき。彼の名篇雄作は、三十二歳を一期としたる死後に現はれぬ。其死後に残したる財産は、唯原稿と常用の衣服一着と金六十三フロリンとのみなりし。ラムの傑作は、非常なる悲痛の最中に成り、フッドが陽氣は、煩悶の中より現はれ出てたり。歌うて曰く、

『浮かれ調子に、

悲哀の音なきものぞなき。

科學界に其例を求むれば、ウオラストンあり。不治の病に冒されて、餘命幾何もなき時、病苦を忍びて、彼が爲したる數多の發見及び研究を筆記したり。そは彼の同胞を利益すべき學問の失はれんことを恐れたればなり。

苦痛の辛

苦痛は假面せる幸福なり、波斯の古哲曰く「暗黒を恐るゝこと勿れ。そは恐らく人生の泉を隠すものなり」と。經驗は往々苦しきものなれども、健全なり。經驗の教訓に依りて、吾人は、苦しみ且つ強くなる事を知り得べし。品性は最も能く艱難に訓練せられ、苦痛によりて成就せらるゝものなり。忍耐にして思慮ある人は、快樂よりも、却つて最大苦痛の中に、智識を集むること多し。

荒れにし暗き賤が伏屋にも、

新たなる光明、絶間なく射し込む。

ゼレミイテラー曰く、「不幸と苦痛とは徳義の學校なり。吾人の精神を沈着ならしめ、吾人の意見を適宜ならしめ、輕佻浮薄を矯正し、墮落を防ぐ。全智全能の神は悲痛を苦とせず。特に聖人賢者に送れり。神慮を度るに、苦痛は愉

幸福は夢想なり

快の學校、徳義の養成場、智識の訓練、忍耐の試験、光榮の門戸なり」と。

又曰く、「不運ならざる者よりも不幸なるはなし。其人は善惡何れに關せず、試験せられざるものなり。神は能力及び氣質だけの徳には光榮を與へず。されど一切の徳行は報酬あるものなり」と。

繁榮と成功とは必ずしも幸福を來さず。最も小なる成功をなしたる人と雖も、人生の眞の樂を樂むこと往々これ有り。ゲーテの成功は、天下に冠絶す。彼は健康、名譽、權力、金錢を有して、何の不足もなかりき。然れども、其一生涯中、眞の幸福を感ぜしは、僅々五週間に過ぎざりしとは、彼自身の自白する所なり。回々教主アブダラマンも、其五十年の治世中、眞の幸福を感ぜしは、僅に十四日なりしと云ふ。之を要するに、幸福のみを求むるは夢想なりと謂ふ可し。

影なき光線、悲みなき幸福、苦なき生涯は、畢竟生涯に、あらず、少なくとも、人生に、あらず、幸福の運命は、纏れたる絲なり。そは、悲みと喜びとより成る。悲みありて、喜びあり。又、苦は、樂の種なり。樂は、苦の種なり。死其物も、人生を樂しく

するものなり。吾人は到底死と離るべからざる約束を有す。ドクトル、ブラウンの説に曰く、死は人間幸福の一要件なり」と。死が家内に入り來るときは、吾人は究理せずして、唯感ずるのみなり。時の経過と共に、悲みを知らざる眼より、一層明かに見ゆる筈なるに、涙に満てる眼は死を見ざるなり。賢者は、人生の頼むべからざるを知る。彼は正當の手段に依りて、成功を期すると共に、失敗に備ふる所あり。彼は能く樂み、能く忍ぶ。怨嗟と不平とは無益なり。唯正しき道に依りて、愉快に仕事を繼續すること、實益ありと謂ふ可し。

賢者は又他人を頼みとせず。彼は他人と平和に生活せんが爲めに、忍耐するなり。如何なる人にも、必ず多少品性の弱點あり。果して圓滿無缺の人ありや。肉に入りたる薊の爲めに苦まざる人あるか。忍耐、克己、寛容を要せざる者果してありや。無慘にも幽閉せられたる、丁抹デントの女王カロリン・マテルダが祈禱中の祈禱なりとて、寺院の窓に書き記したる語は、『あゝ、われをして無邪氣ならしめ、他人を大ならしめよ』なり。

人間の氣質は天賦の本質及び幼時の境遇に依る所甚だ多し。家庭の愉快なると不愉快なると、天賦の特質及び模範の善惡に依りて、人は左右せらる。故に此等に注意することは、何人にも仁惠と抑制とを教ふるものなり。同時に、人生は常に吾人自らの作る所なり。各自の心は各自の小世界を作るものなり。愉快なる心は、人生を愉快にし、不満なる心は、人生を不愉快にするものなり。『わが心はわが爲めに王國なり』とは、農夫にも帝王にも、同様に適用せらるべき語なり。王となるも、奴隸となるも、心一つなり。人生は畢竟各自の鏡にして、吾人の心は、一切の位置と運命とに、高く或は卑く、眞の品性を與ふるものなり。善人には浮世は善なるものにして、悪人には惡なり。若し吾人の人生、觀進めば、即ち必要なる盡力、高尚なる生活及び思考、自他の利益の爲めに働くこととの範圍として、人生を觀ば、人生は愉快にして、希望あり、幸福あるものなり。之に反して、私利、快樂及び増殖に對する機會と觀ば、人生は苦勞と失望とに充てるものなり。

故に、人生には、吾人の解し能はざる不思議を見ること多し。實に、人生は神

秘的なり、恰も暗中鏡に對ふが如し、然れども、吾人は十分に經驗の訓練を経ざる可からざる所以を理解し得ずとも、吾人各自の生涯より成れる計畫の完全なる事を信ぜざる可からず。

職分は人
生の極致
なり

吾人は各自應分の職分を盡くさざる可からず、眞實なるものは、唯職分あるのみにして、職分を成し遂げると云ふ事の外に、誠の行爲なるものあらず。職分は人生の極致なり、眞の愉快は職分の成就を自覺する時に感ぜらるゝものなり。又満足と云ふ事も眞の愉快にして、不満足は後悔と失望とを招くものなり。職分の自覺は、夜半吾人に音楽を與ふるものなりとは、ジョージ・ハーパーの語なり。

吾人が此世に於て吾人の仕事を終りたる時は、恰も蠶の絲を吐きて死するが如く、死するものなり。且つ吾人の生涯は短かしと雖も、最大なる目的を抱きて渾身の力を致すは、吾人の天より受けたる使命なり。故に能く其目的を達し得ば、吾人の肉體は死しても、吾人の生命は永久なり。詩に曰く、

故に、我等は眠るが如く死して、

あるはわた毛、あるは塵を枕に
まめやかなる墓の下に
我等が肉體をまかすなり。

(をばり)

明治三十九年二月廿六日印刷
明治三十九年三月四日發行

品性論の上

定價金四拾錢

著者 竹村修

發行者 山縣操

東京市本郷區駒込西片町拾番地

印刷者 青木弘

東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十番地

印刷所 株式會社 秀英舎第一工場

東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地

不許複製

發行所

東京市本郷區駒込西片町十番地
電話 下谷二千四百五十三番

内外出版協會

加藤眠柳著
女子立志編

（並製本美金拾錢 * 郵稅四錢）
 （並製本美金拾錢 * 郵稅六錢）

婦人及家庭の最好最良の讀物

中央新聞評 歐米に於て最も欽仰すべき女傑名媛十有九名の略傳にて、小説家としてストリー、エリオット。詩人としてブローニング、インジエロー。看護婦としてナイチンゲール。慈善家としてフライの如き、其他新聞記者、説教講談家、科學者、著作家、美術家、教師、旅行家、仁人等、一として**婦女百世の龜鑑**たるざるはなく、其一人の傳を擧ぐるも猶浩瀚なる大冊を編成すべきに、著者**流麗の筆**能く二百餘頁の小冊子に是等諸名媛特異の面貌を縮寫して、讀者の眼前に髣髴たらしめし伎倆と努力とは實に多とす可き也。著者巻頭に序して「余は本書を草するに當り、其人其言其行其徳に感激して稿を抱いて數次涕泣するを禁じ得なかつた」と云ふ、以て本書の内容を窺ふに足る可く、或程度まで教育を受けたる女子家庭の讀物としては、多く其比を見ざるの**好著也**。

時事新報評 歐米に於ける十九の名媛傳記を集めたり。其人物中には小説家あり、詩人あり、科學者あり、美術家あり、行文流暢にして**趣味あり主張あり**。家庭の讀物として最も適切な冊子なるべし。

報知新聞評 ボルトン女史の「世界に名高くなつた少女」其他より泰西の閨秀十九人を選び、**流麗澹遠の筆**を以て巧みに纂譯したるものなり。一般ノ家庭に洽ねからしむべし。

東京元本郷區駒込西片町十番内地外出版協會

明治三十九年五月卅一日印刷
 明治三十九年六月四日發行

（品性論の下）
定價金四拾錢

不許
 複製

著者 竹村修

發行者 山縣操

印刷者 青木弘

印刷所 株式會社 秀英舎第一工場

東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地

發行所

東京市本郷區駒込西片町十番地
 電話 下谷二千四百五十三番

内外出版協會

20/7/39

佛人ノグロネ原
文士學竹村修譯述

家庭講話

(錢四稅郵 * 錢拾五金價定)

家庭講話は家庭の指針なり、品性修養の大道場なり。家庭は人生の基にして、社會の清濁、人生の幸不幸は、一に其の善惡如何に依る。本書はシムブル、ライフ(簡易生活)の著者ワグネー氏の名著にして、原本を「By the Fireside」といひ、米國大統領ロウズヴェルト氏が十讀三嘆したるもの、家庭と云ふ問題を捉へ來りて、家庭、家庭の精神、結婚、父母の本分、親子の關係、兄弟姉妹、老人と少年との關係、傭人、家庭と動物、家庭の整理、女子の仕事、家庭の幸福、來客應接法、家庭の宗教等、二十有二章に分類して、人生の神秘を闡明し、處世の要訣を説く、奇抜なるが如くにして、其實穩健、飽くまでも實際的にして、高遠なる思想を藏し、譬喻奇抜にして適切、趣味津津々湧くが如く、片言隻語も、之を行くことなきものなり。譯筆の平易輕妙流暢なるは、原文の筆致語格を傳へて間然する所なく、一讀卷を措く能はざらむ。既に家庭を作る者も、將に家庭を作らんとする者も、圓滿なる人生の幸福を味ひ、健全なる進歩的生活を爲さんと欲せば、宜しく本書を讀め、老人も、青年男女も、必ずや教訓と警戒と同情と獎勵と希望と慰安とを受けて、至高の靈化を被らん。

東京本郷區駒込西片町拾番内地外出版協會

SMILES' SELF-HELP

上賢造譯述

自助論

(錢四稅郵 * 錢拾四價定 * 版再卷上)

此書は本會既に出版する所の職分論、勤儉論、品性論と共に博士スマイルズが四大著書の一にして、自から助くるの必要を説き、貧窮より出でたる自助的大家人物の略傳を掲げ、實例を以て、身を立て世に處するの道を教ふるものなり、即ち忍耐、剛毅、堅忍、勇猛、不屈、勤勉、耐久、奮闘の生活を鼓吹するものなり。

我國曩に中村敬宇先生の翻譯あり、「西國立志編」として、人其名を知らざるものなし。但敬宇先生の譯文は明治の初なりしを以て、古風の漢文調假字交り文にして今日の青年に讀み易からず、且原文を省略せし個處も甚だ多きを以て、本會は深く之を遺憾とし、更に訂正原本に據りて新に翻譯出版せり。

譯文は平易簡明を旨として直譯風を避けたれば、何人にも讀み得べく、又専ら原文の意味に忠實ならむことを勉めたれば、原書を學ぶにも机上の好伴侶となすを得べし。第二十世紀の日本國民にして、世界有名の書を読まざるは恥なり。スマイルズ博士の大精神を知らざるは損なり。真正なる人間の道を踏まんとするものは本書を讀むべし。人たるの本分を發揮せんとするものは本書を讀むべし。

東京本郷區駒込西片町拾番内地外出版協會

内外出版協會編纂

袖珍百科全書

洋裝 定價 金壹圓貳拾錢

美本 小包 郵稅 地 東京市內 金五錢 方 金拾錢

- ◎天文 ◎地理 ◎政治 ◎外交 ◎軍事 ◎法制 ◎經濟 ◎實業 ◎人事
- ◎學藝 ◎宗教 ◎雜事 ▲附錄 (各國度量衡貨幣等精密比算、圖式)

本書 天地間有らゆる事項を網羅類聚して文明の新智

識を供給するを主とす。其體裁歐米諸國に盛に行はるる小價格の

低廉と繙閱の便益可は則ち可なりと雖も、浩瀚高價にして購買携帶

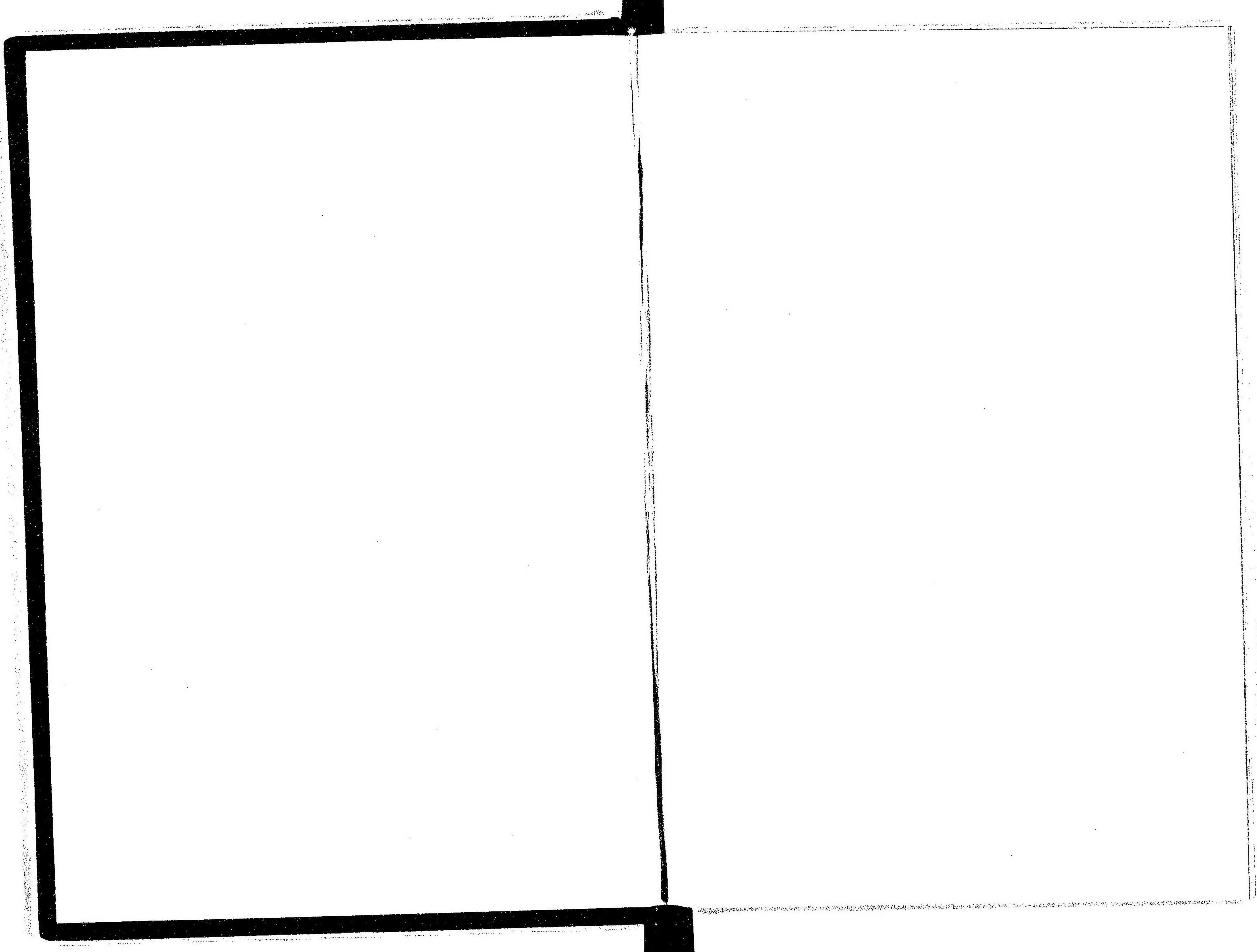
に便ならず、且つ歐語に達する者にあらずんば用を爲さず。又本邦在來歐米

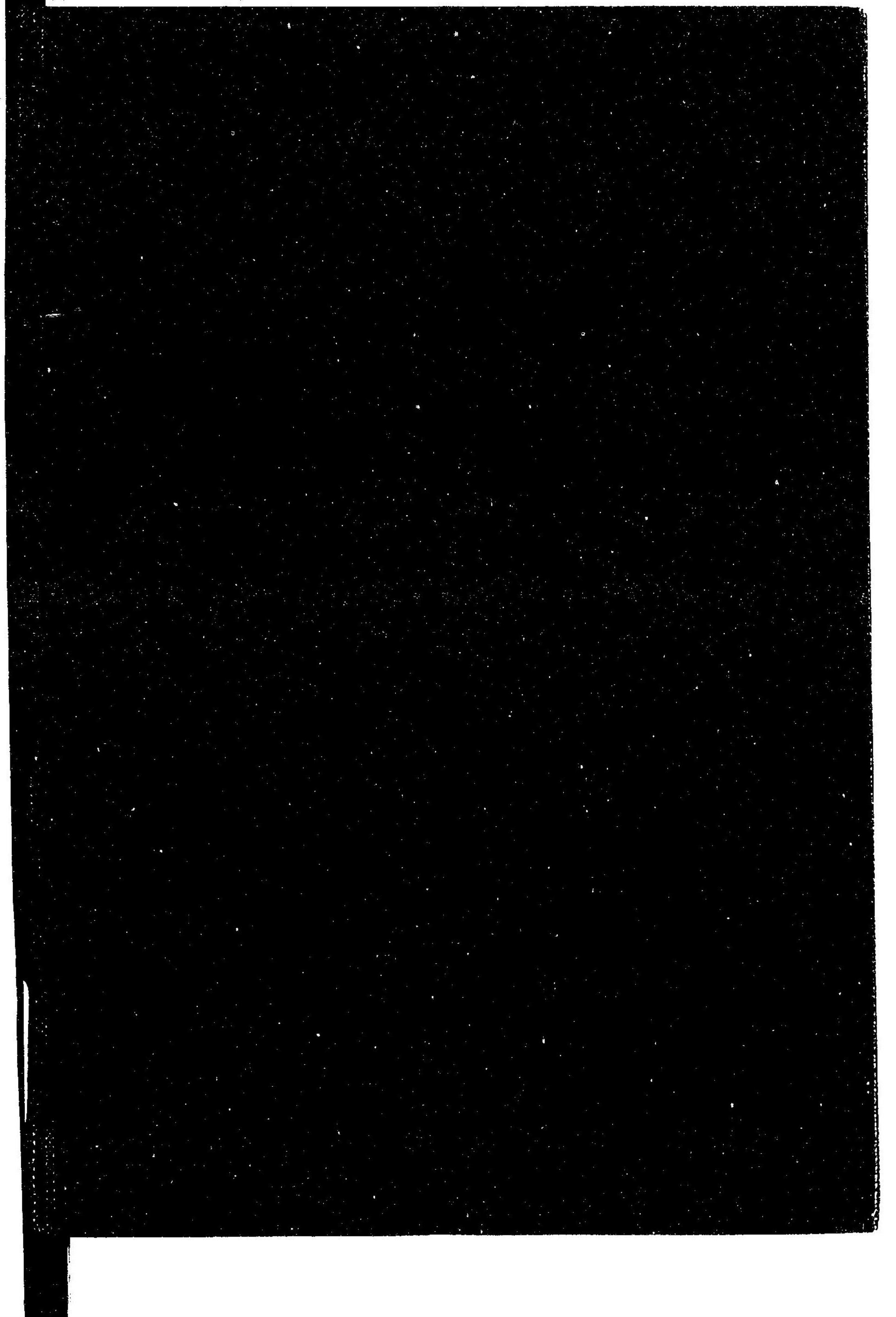
の『大雜書』は鄙陋にして無用の事項多く、日新の今日に適せず。本書は

最新の百科全書に基きて其粹を抜き、和漢從來の緊要事項も亦之を洩らさず、

乃ち一小冊子なりと雖も、之を座右に勝るや萬々なり。

元版 東京本郷區駒込西片町十番地 内外出版協會





27
282

011292-000-4

27-282

品性論

サミュエル・スマイルス/著

M39

AAE-2941



